

エ イ コ ス

— 十七世紀フランス演劇研究 —

XI

- | | |
|---------------------------|-----------|
| ロトルーのプラウトゥス三部作について | 浅谷真弓 (1) |
| フランス演劇関係古文書資料一覧：1601-1606 | 戸口民也 (19) |
| 翻訳 コルネイユ、『シュレナ』 | 小林 卓 (29) |

作品梗概集

Rotrou: Les Ménechmes

会員名簿

ロトルーのプラウトゥス三部作について

浅谷真弓

ロトルーの作品の出典はギリシア悲劇、ローマ喜劇、スペインのコメディア、イタリア喜劇、先行パストラルに大別され、そのうち、ローマ喜劇はいずれもプラウトゥスを原作とした三作である。最初が《メネクムたち》で、ダイエルコウフ=オルスボエルによれば、1630年頃、次いで1636年から37年の《ふたりのソジー》、1638年の《捕虜たち》となる。ラテン語の知識を通して知られるギリシア悲劇に比べれば、⁽¹⁾ローマ喜劇は格段に近付き易いが、原作に直接当たっているかどうかは定かでない。とはいえ、カエキリウスでもナエティウスでもなく、ましてやテレンティウスでない理由はあっただろう。⁽²⁾後世の評価はテレンティウスをもってローマ喜劇の洗練を根拠付けるから、選択の余地は残っていたと見てよい。

以下で三作を比較し、共通点を探りながら、他の作品群との位置関係を測って行きたいと思う。

I. 《メネクムたち》の謎、あるいは取り違えと媒介

メネクム=ソジクル(以下、混乱を避けるため、単にソジクルとする)は子供のころに拉致された兄弟の片割れを探す。六年の探索の旅の後、メネクム=ラヴィ(以下、ラヴィ)のいる港町に流れ着く。結婚しても浮気の虫の治まらないラヴィと、反対に、恋することを知らない堅物に成長したソジクルとの対照が描かれて、幕が開く。⁽³⁾父親、名前、顔が同じで、生活環境だけが異なっている、というのが、幕開け前段の状況設定であるが、ひとりの女との出会いが彼らの運命を変える。

美貌の寡婦、エロシーは、ラヴィにしつこく言い寄られて辟易の日々を送っている。勿論、ラヴィには妻があるし、彼の悪い噂は町中、周知のことである。そんな浮気の相手になれば、自分の評判が落ちるのは明白だ。尤も、そこまで愛されて悪い気はしない、と本音を吐く場面もあり、ダイヤモンドの髪飾りは魅力的である。プレゼントを受け取って、エロシーが言う。

(I-3)EROTIE.

Quoiqu'indigne, monsieur, d'un présent de la sorte,

Puisque vous l'ordonnez, il faut que je le porte.

Qu'il est bien travaillé! j'admire sa beauté:

Tout ce que vous donnez à cette qualité.

このダイヤモンドが兄弟を結び付けていく重要な小道具となっている。エロシーとダイヤモンドを通して、兄弟はまず間接的につながる。エロシーの下僕によるラヴィとの取り違えに続いて、エロシーの取り違えが起こる。初対面の場が同時に、観客に事情を再度説明し、確認させ、今後の展開を予測させるよう仕組まれていた。一目惚れから始まる事件というパターンは他にもあったのだが。⁽⁴⁾

(II-3)EROTIE.

Qu'attendez-vous, monsieur, quand la porte est ouverte,

Moi dans l'impatience, et la table couverte?

(.....)

SOSICLE.

Dieux! le divin objet! Je me rends, Messénie,

Et puis résister à sa force infinie.

MESSENIÉ.

Il est vrai qu'elle est belle.

共通点として、父親、名前、顔に嗜好、趣味が加わったと言うべきなのか。エロシーには、つい先程別れたばかりのラヴィと目の前にいるソジクルとを弁別する方法が完全に奪われているので、ソジクルの言動は悪い冗談をすぎて狂気の徴に聞こえる。

(II-3)EROTIE.

Que cet homme est saisi d'une folie extrême!

Il renonce à son bien, et se maudit soi-même.

それに対し、ソジクルの方も、エロシーの上のような言葉を気を引くための手管と勘違いしてしまう。だから、続く場面でエロシーがラヴィに関する情報を提供しても、ソジクルはそれを適

確に受け取れない。取り違えられた時点で、もしや、と推理力を発揮することはないし、メネクムという兄弟共通の名前、モスクという父の名前、シチリアという出生地を言われて、不在の片割れに思いをいたすことがない。彼を探すことこそが、旅の、というよりむしろ、この六年間の生きる目的であったのに、だ。エロシーのソジクルに対する評価は極めて正しい。彼は既に狂気の人である。ここでラヴィはソジクルにとって、文字どおり、決定的に失われ、奪われた。エロシーに言われるまま、ラヴィになりすまし、下僕を残して彼女と共に去るソジクルは、もはや登場の時の陰鬱な男と同一人物と思われぬ。

(II-3)SOSICLE.

(.....)

Oui, je suis ce Ménechme, esclave de vos yeux,
Ces astres les plus doux qui brillent en ces lieux,
Dont l'unique douceur me conserve la vie,
Et m'anime au défaut de mon âme ravie.

主人のあまりの朴念仁ぶりに呆れたはずの下僕が、一転、今度はすべてを忘れて女について行く姿を見送るはめに陥る。

(II-3)MESSENIÉ.

Qu'il soit sourd maintenant à mes sages propos;
Gardant ce que je tiens j'ai l'esprit en repos.
Dieux! je tremblois de peur, car il est si facile
Que pour une faveur il en rend toujours mille,
Et que, pour le plaisir d'un repas seulement,
Il nous eût mis au point de jeûner longuement.

本人が言うように、ソジクルはそのメネクムとやらに变身し、魂を奪われ、(すなわちラヴィされ)、ラヴィの環境の中で別の狂気を演じる。周囲の人間にとって、エロシーに対する恋がソジクルとラヴィを同一人物と思わせる条件を強化して、以降の取り違えはますますレゾナブルとなる。必然的に、同じことが他方のラヴィにも起こる。

(III-6)EROTIE.

エイコス XI

Monsieur, je n'entends rien à ces jeux déplaisans,
Ne m'importunez plus, et gardez vos présens.
Votre joyeuse humeur s'est assez exercée,
D'autres soins maintenant m'occupent la pensée;
Adieu.(Elle rentre chez elle.)

双方が自分の下僕、食客たちの前で演じる二重の狂気、二組の取り違えの混乱状態は終幕近く、
ようやく兄弟を引き合わせる。

(V-7)MESSENIÉ.

Que voyez-vous, mes yeux? ô prodige! ô merveille!
Je doute si je vis, je doute si je veille.

(A Ménechème Sosiclé.)

Mon maître est en deux lieux. Que vous veulent ces fous?

Je vais vous secourir et seconder vos coups.

(.....)

RAVI.

O toi, qui que tu sois, dont la main favorable
M'est encor cette fois au besoin secourable,
Seul ami qui me reste, auteur de mon repos,
Que ton secours me vient et m'assiste à propos!

SOSICLÉ.

Dieux! je vois mon image.

それでも、ほどけた紐の両端が、何度も同じ場所を行き来した末に堅く結ばれるように、一見無
駄な取り違えが、二人の共通点を強く主張し、再会をレゾナブルに根拠付けるための媒介行為
として機能していたことがわかる。各人の食客と下僕の証言。

ERGASTE.

Ce n'est qu'un même objet, je ne puis deviner
Qui des deux ce matin m'a réduit à jeûner.

MESSENIÉ.

Qui de vous est Ménechme? Oh! que j'ai d'espérance
Si je puis de vous deux faire la différence!
Si le ciel aujourd'hui favorise mes vœux,
Je trouve un seconde maître, et vous l'êtes tous deux.

以下、最終的な事実確認が行われる。

MESSENIE.

Mais quel est votre nom? tirez-moi de souci.

RAVI.

On m'appelle Ménechme.

SOSICLE.

Et moi Ménechme aussi.

MESSENIE.

Quel est votre pays?

RAVI.

Syracuse, en Sicile.

Mais las! depuis long-temps je demeure en cette île:

Je fus pris chez mon père en mes plus jeunes ans.

SOSICLE.

C'est lui, n'en doutons plus. Que mes vœux sont contents!

MESSENIE.

Et votre père a nom?

RAVI.

Mosque.

SOSICLE.

O dieux! ô mon frère!

O rencontre agréable! ô fortune prospère!

終幕の食客の結びは言い得て妙で、取り違えと媒介の性格を示してぬかりがない。

ERGASTE.

(...)

Si la soif, ce matin, m'a fait verser des larmes,

Qu'elle me va, ce soir, faire verser de vin!

ここでの疑問は、だがなぜ二人がそこに至るまで互いに不審を抱かずにいたか、ということである。一方のラヴィの言い訳はたわいがない。

RAVI.

Oui, si j'en ai de vous le moindre témoignage.

SOSICLE.

Quand vous fûtes ravi, nous étions de même âge.

Orante est notre mère.

ソジクルの下僕が記憶を呼び覚まそうとすると、途端にあやふやになる。

RAVI.

Le temps n'a de ton nom effacé la mémoire.

下僕の名前を覚えていて、兄弟の名前を忘れるなどということがあるだろうか。他方のソジクルは恋によって理性を喪失したからだと言え、言うことは可能だが、決して充分ではない。取り違えが媒介行為として機能するのに比して、媒介行為を阻害する要因がやや説得力に欠ける。周囲の人物が兄弟の類似性に欺かれるのはともかく、ラヴィとソジクルが推理や想像をしないという致命的な欠陥がある。しかし、認知の興奮、エロシーとの恋をめぐるエロシーやラヴィの妻らの誤解にまぎれて、問題が認識されずに終わってしまう。つまり、裏を返せば、全幕を通じて媒介を阻害するのは喜劇の登場人物に特有の粗忽さに限られるということだ。そしてその粗忽さこそが、兄と弟の関係、それを弁別して初めて可能になる互いの自己同一性を奪い、周囲の人物らに狂気と認定されるごときずれを生じさせていたのである。だから謎はむしろ、彼ら兄弟の外見上の相似にあるのではなく、内面の曖昧さにある。狂気と見做され、拘束、収監の危機に直面した彼らは、媒介者ともなりえた人物らの存在に助けられ、自己同一性を取り戻す。彼らの再認は、それぞれの兄や弟に対して行われるのみならず、自分自身に対しても行われたと言える。だが次に、そのような媒介者を持たない物語が取り上げられる。

II. 《ふたりのソジー》、冥界同道

《メネクムたち》で、外見の相似が直ちに兄弟再会の手掛かりにならなかったのは、「単に、」彼らの粗忽さが原因だった。いや、それこそがこの喜劇の傑作喜劇たる所以だった。かくして馬鹿者という呼び名はこの喜劇の中で最も名誉あるものとなった。相互の弁別手段を喪失した瓜ふたつの兄弟という問題も、彼らが同時に今この場所に確かに存在している、その動かし難い事実によって一気に解決可能である。アリストテレスは言う、ある物事のなにであるか(本質)を言い表す説明方式が他の物事の本質を明らかにするそれと区別されえないときには、むろん説明方式それ自らはすべて(類と種差とに)分割されても、これらの物事は一つだと言われる。このように物事は、増大されても減少されても、その説明方式が一つであれば一つである、と。⁽⁵⁾ただし、そのことを証言する人物がいれば、の話だ。証言者は、そっくりの、当の相手であってもかまわない。どちらかが、おまえはわたしではなく、わたしはおまえではない、と言ってくれさえすればいいのである。

ソジーの場合、事態は非常に込み入っていた。ジュピテールとメルキュールは、ジュピテールが恋したアンフィトリオンの妻アルクメーナを恐れさせないように、それぞれ、凱旋した將軍アンフィトリオンとその奴隷ソジーに化身し、彼女を訪れる。盗っ人の神様メルキュールは最初に奴隷の外見を奪うが、それのみで満足しない。⁽⁶⁾

(I-3)MERCURE, à part.

Prenons de sa figure et de son propre nom

Le droit de le chasser de sa propre maison.

彼は暴力的に外見と名前、身分、背負って来た過去までも奪い取られ、奴隷という身分が身分であるだけに、いつときさっぱりした気分になる。無理もない。

(I-3)SOSIE.

(.....)

De cet heureux malheur naîtroit ma liberté,

Et ce seroit me perdre avec utilité.

(Il sort.)

いつもよりやけに長い夜、自分が自分であることに自信をなくす恐怖をまだ、臆病な奴隷は心

底知ってはいない。目前の鉄拳の痛みから逃れ、奴隷の境遇から逃れた偽りの幸福感に、正常な判断力が麻痺している。ソジーの臆病さはメネクムたちの粗忽さと双壁である。彼から自己の同一性を取り上げたのは、暴力に屈する臆病さ、自分を信じ切ることのできない精神的な弱さなのだ。尤も、こんな彼を責めるのは筋違いだろう。これは喜劇だから。それに、彼は姿と名前を奪われても、ちゃんと自分の頭で何かしら考え、ひとりごとを言い、歩き、ソジーでないにしても確かに誰かではあって、しばし、揺らぐ自己同一性の危機とは一線を画していられるように見える。少なくとも感覚の上で、元ソジーにとって、現ソジーが「元」の存在を排除しないことは明らかである。実際、排中律、矛盾律は奴隷には無効である。⁽⁷⁾論理性とはとてもあいいれない、思考の緩さ、あるいは超人的弱さともいったものが彼をより深い恐怖から救っているのだ。他者との関係においては保証の限りでない、無根拠であるがゆえに妙に充実した、危機に際して緊急避難的に発動される自己の強い感覚に支えられている。刺激を受けて反射的に結束する、その瞬間だけの彼が存在する。

だが、メネクムたちには解決策だった、わたしはおまえではない、おまえはわたしではない、という呪文がメルキュールの口を通して告げられると、殆ど機能しなくなる。メルキュールは奪うだけで代わりものを返してくれないからである。それどころか、では、おまえはだれだ、と後に続く。

(I-3)MERCURE.

Eh bien! suis-je Sosie? as-tu lieu d'en douter?

T'ai-je assez bien guéri de cette frénésie?

SOSIE.

Mais moi, qui suis-je donc, si je ne suis Sosie?

この難問に対しては、先程の無根拠な充実感などまったく意味をなさない。他者との関係において自己の位置を規定し、弁別する価値の体系から排除されたとき、絶対的な無価値の冥界が待っている。以前の奴隷は最下等の身分ではあるが、とにかく価値の体系の中にあっただけから、その体系内の「無価値」とは次元がちがう。奴隷には懐疑をもって彼の存在を保証してくれるありがたい神がはず、人間を断念しなければならない。

(III-4)SOSIE.

Entrez, je vais voler, je ne marcherai pas.

(II sort.)

主人に化けたジュピテールに易々と欺かれ、奴隷は再び彷徨する。彼の「神」とは、そういう神なのである。そして彼の彷徨に同道する主人の災難は、彼以上に既存の制度、すなわちジュピテールを権力の根拠とする価値体系に加担し、その恩恵に浴し、喪失しただけに深刻かつ重大で救い難い。他者の保証に強く依存した主人のありようは論理的でレゾナブルであるとも言えるが、奴隷のとは別の脆さがある。主人の生の充実感や存在を支えるに耐えない。彼自身の感覚より、妻の侍女の言葉の方が信頼に足る。

(V-5)AMPHITRYON.

Qui suis-je?

CEPHALIE.

Amphitryon.

AMPHITRYON.

De toute ma famille

La raison est restée à cette seule fille,

Ou leur aveuglement naissoit de leur dessein.

(.....)

AMPHITRYON.

Le ciel est trop soigneux de conserver mon nom.

しかし、奴隷のもう一柱の守護神メルキュールは、彼を殴りつけ、その痛みによって彼の存在を思い知らせるだけの力はある。論理的には無意味、無価値であっても感覚的には存在する矛盾を何と名付けるべきか。これもまた、奴隷にとっては「現実」なのだ。

(V-1)SOSIE.

Je suis mort! au secours! épargnez-moi, de grâce.

Sosie! hélas! ta main sur toi-même se lasse!

Tu frappes sur Sosie! Arrête, épargne-toi.

「死ぬ=mourir」という動詞の一人称の活用は無効であるはずだが、絶対的無価値の冥界の住人になった奴隷はあえてそれによって自らの生存を主張することに成功する。別の自分に殴られ、対象化され、隷属させられながら、今ある自己の充実感を手に入れる奴隷の知恵と主人の論理

性はどこまでも異質だ。暴力的な(殴る=考える)主体と無抵抗の対象と化した自己の恐るべき分裂に直面し、あろうことか、奴隷の祈りは当の権力主体にむかって差し出される。

(V-1)SOSIE.

Trêve, au nom de Mercure, à ta valeur extrême;
Je renonce à mon nom, je renonce à moi-même.
S'il vrai que Sosie aime de s'outrager,
Je ne suis plus Sosie, épargne un étranger.

この激烈に皮肉な状況を解消するために、奴隷はまたもやあの超人的弱さを発揮し、価値体系を二重化する作戦に出る。願い空しくメルキュールが去って、彼の生の充実感を支えてくれる主体が不在となれば、主人同様、彼の存在の根拠は、今度こそ論理的、制度的たらざるをえまい。

(V-1)SOSIE, seul.

(.....)

Soyons double Sosie au double Amphitryon.
Malheureux que je suis par une loi commune,
Cherchons le malheureux et suivons sa fortune;
Compagnon de son sort partageons son souci;
S'il périt, périssons; s'il vit, vivons aussi.

(Il sort.)

責任転嫁された主人は、先に見たように無事ジュピテールの許しを受け、妻の侍女の託宣で救い出され、その恩恵が奴隷に波及する形が取られる。が、主人を救い出したアリアドネの糸は余程緩かったのか、奴隷はまだ迷路の入り口に立って、来た道を振り返り振り返り、納得のいかない表情である。

(V-6)SOSIE seul.

Cet honneur, ce me semble, est un triste avantage:
On appelle cela lui sucrer le breuvage.
(.....)

奴隷はもはやただ臆病なだけの奴隷ではない。弱さの意味を知った。制度と権力と生きることの矛盾を身をもって体験してしまった後で、既存の価値体系の中に再認された自己の位置が安住の場所でないことくらい、見通せる。二度あることは三度あるのだ。これでは依然として、お前は誰なのか、という問題は解決されていない。メネクム兄弟が味わった自己との再会、認知の喜びがないのも当然だろう。思い返せば、彼らはあまりに無邪気だった。実に、彼は昔の彼にあらず、だ。それともメルキュールは奴隷の願いを聞き届け、役目に忠実に、過去の彼の「なにであるか」を奪い去り、別の代価を与えたのだろうか。但し、惜しむらくは、その代価の名前を奴隷は最後まで知らない。

III.解放された《捕虜たち》、その後

父は、敵国に捕虜として拘束されている息子と手持ちの奴隷とを交換しようとした。だがその奴隷こそ、既に売りに出されていたもう一人の息子だった。《捕虜たち》の骨子はこう要約できるだろう。⁽⁸⁾では、父が望んだ交換は成立しなかったのか。当初の目的から見ればそうである。しかし、彼の意図せざる交換はどうか。

第一幕、その女は捕虜の「フィロクラート」を恋していて、財産分与を条件とした結婚にふんざりがつかない。許婚は、女友だちの行方知れずの兄である。彼女が恋する捕虜は、実はタンダールという、敵国の貴族フィロクラートに仕える奴隷である。既に一度、カードはすり替えられている。

(I-1)OLYMPIE.

Ecoutez: "A Philocate."

PHILENIE, prenant la lettre.

O dieux!

Tu ne saurois, ma main, désauver mes yeux.

Cette lettre, il est vrais, lui portoit ma franchise:

(.....)

女友だちの父親は、息子に入ってくるはずの財産も欲しい。捕虜になっている二人の息子のうち、一人は消息不明で、残った一人だけでも取り戻そうと画策した父は、昨日買った奴隷と、残

りの息子を交換しようとする。第一の交換計画である。その昨日買った奴隷がつまりはフィロクラートとタンダールのコンビであった。

(I-3)HEGEE.

(.....)

Puisque de mes deux fils je n'avois plus que lui,

(.....)

Et je puis établir une attente solide

Sur l'achat que je fais des prisonniers d'élide.

Un entre autres, et riches, et puissant à le voir,

M'a flatté plus que tous de cet heureux espoir

Que son père, sachant ou' son malheur le range,

De mon fils et du sien moyennera l'échange.

(.....)

Le temps ne presse point, viens à l'heure ordinaire,

Et permets cependant que j'entre chez mon frère

Pour voir d'autres captifs qu'on me regarde chez lui.

女と父親にとって、問題は突如、焦眉となった。

第二幕、主人フィロクラートと奴隷タンダールの交換が行われる。

(II-5)PHILOCRATE.

(.....)

Souviens-toi qu'aujourd'hui ton nom est Philocrate,

Et que, pour profiter de ce déguisement,

Il faut changer de nom comme de vêtement.

Tu mets ce bon office à sa gloire suprême

Si pour l'amour de moi tu crois être moi-même.

(.....)

TYNDARE.

Je suis donc Philocrate, et vous êtes Tyndare.

Depuis que de ce nom vous m'avez honoré,

J'en suis plus honn te homme et plus considéré;

(.....)

タンダールは後にエジェの息子と判明、この時父子は知らずに対面する。二人の関係をもしやと疑わせるほのめかし、暗示がばらまかれ、観客は行われつつあるカードゲームの規則を理解しはじめる。

(II-6)TYNDARE.

Quoi! votre fils captif?

HEGEE.

Oui, captif comme vous;

Le sort dessus vous seul ne lâche pas ses coups,

Et l'inconstant eût cru que mes vieilles années

Eussent, sans ce malheur, coulé trop fortunées.

(A Philocrate.)

Mais je vous veux parler; séparez-vous. Toi, viens,

Réponds sincèrement, et ne déguise rien.

N'es-tu pas son esclave?

PHILOCRATE.

Oui.

HEGEE.

Ton nom est?

PHILOCRATE.

Tyndare.

TYNDARE, à part.

La pièce a commencé, ma scène se prépare.

フィロクラートの身代金、財産を目当てに、父はその奴隷に、貴族の父親捜しを許す。自称フィロクラート、実はタンダールを人質に残し、主人は解放される。

(II-6)HEGEE.

Lui dois-je confier cette commission?

Oui, détachez ses fers et ceux de Philocrate.

(.....)

Venez quérir votre ordre et prendre un passe-port

Pour le premier vaisseau qui partira de port.

後から考えて見れば、敵国の貴族の捕虜が解放され、実子が残ったのだから、捕虜と実子の交換という目的を完遂したことになろう。勿論、来るべき事件に仕組まれた立派な伏線である。冷静になってはじめて汗が出る、そういう種類の皮肉だった。父は使者(奴隸)と人質(主人)との交換を計画する。父による第二の交換計画。

第三幕、タンダールの正体露見。

(III-3)TYNDARE.

(.....)

Donnant sa liberté, Philénie en veut une.

La mienne n'est plus mienne, elle est à la fortune.

タンダールの正体露見の場はかなりご都合主義的であるが、交換の妙手を見せるためには証言者の出現が必要で、その意味ではデウスエクスマキナの良き使用法とも言える。

主人同様、エリードの貴族で捕虜、クリジマンによる第一の認知。

(III-4)CRISIMANT.

Qui te fait, cher Tyndare, errant de toutes parts,

Et des pieds et des yeux éviter mes regards?

(.....)

HEGEE.

J'ai bien dès cet abord reconnu sa folie:

Il vous nommoit Tyndare.

(.....)

Viens ça, qui que tu sois, Philocrate ou Tyndare;

Il est temps de finir ce douteux entretien.

Es-tu né libre ou serf? ne me déguise rien.

TYNDARE.

Je suis né libre.

再び拘束が待ち受けている。以降、父子の会話はダブルミーニングの連続となる。

(III-5)HEGEE.

Liez, et jusqu'au sang serrez ce détestable,

Qui me rend de ces lieux et l'opprobre et la fable.

TYNDARE.

Ces liens à mes mains seront encor trop doux:

Vous les pouvez couper puisqu'elles sont à vous.

第四幕、フィレニーの恋人の正体判明、フィロクラートによる他方の息子の発見、拉致され、消息不明の息子の行方を知る奴隷の発見。

(IV-5)PHILENIE.

Né de condition à mon sort si contraire,

Tu serois pour toute autre et traître et téméraire:

(.....)

Oui, Tyndare, je t'aime et ne veux point de toi;

Je te serai fidèle et retiendrai ma foi;

(.....)

彼女の恋人は主人フィロクラートでなく、奴隷タンダールであるという第二の認知。残った交換の種明かしはただひとつだ。その前に、奴隷と入れ代わって鎖を解かれた主人フィロクラートが自分と交換される予定であったエジェのもう一人の息子を伴って戻って来る。主人は自分の奴隷とこの捕虜とを交換しようとしたのか。いずれにせよ、父は念願の息子の奪還に成功する。食客はその情報と今晚の夕食を等価に見積もる。

(IV-8)ERGAZILE.

Les dieux ne gardent rien, ils donnent toutes choses.

Ecoute à quel degré je relève ton sort,

Et quel comble de biens je t'apporte du port.

Ton esclave d'élide avec ton fils arrive;

(.....)

HEGEE.

Mon fils?

ERGAZILE.

Ton fils lui-même;

新しいものから古いものへ、裏返されたのはちょうど逆の順番でカードが表へ返るように仕組まれた交換が最後の一枚に差し掛かる、第五幕。まずは帰還した息子クリゾフォルが、主人を信じて待っていた忠実な奴隷タンダール(実は兄弟)の解放を申し出る。エジェ自ら鎖を切るであろう、というタンダールの予言の的中。

(V-1)CRYSOPHORE.

Remettez en ses mains cet esclave fidèle

Dont avec tel succès il éprouve zèle;

Laissez-lui voir le jour, tirez-le de prison,

Et de sa liberté payez sa trahison.

最終的な第三の認知はこどもを拉致し、売った古い奴隷の告白で行われる。息子を買った金持ちの貴族こそ、フィロクラートの父テオドールだった。

(V-2)STALAGME.

Entrant dans la maison,

Comme il changeoit de sort on lui changea son nom;

Il s'appeloit Crisale, on le nomma Tyndare.

3、4、5 場は父子、兄弟、妹の対面に費やされる。調子に乗った父はクリゾフォル(タンダール)との結婚をフィレニーに強制し、まだクリゾフォルの正体を知らされていないフィレニーは頑なに拒否し、笑いを誘う。フィロクラートはどさくさ紛れにオランピーとの結婚の許可を得、また傍筋での奴隷同士の結婚成就が宣言されるなど、ウエルメイドコメディの定石が用意されている。フィロクラートは奴隷(兄)タンダールの代わりにその妹を貰った格好だ。

以上に見てきたように、登場人物らは様々な形で役柄の交換にかかわっていた。各人が行った交換の収支を簡単にまとめてみよう。

- 1) タンダールは主人の代わりに自分自身を差し出し、出生証明、フィレニーとの結婚許可を得る。
- 2) フィロクラートは奴隷タンダールを差し出し、自身の自由、妻オランピーを得る。
- 3) クリゾフォルは奴隷タンダールの解放を進言し、兄クリザルを得る。
- 4) フィレニーは奴隷タンダールを失い、夫クリザル、財産分与を受ける。
- 5) オランピーは自分自身を差し出し、二人の兄、夫を得る。
- 6) エジェは捕虜フィロクラート、奴隷タンダール、娘オランピーを差し出し、クリゾフォル、クリザル、フィレニーの持参金を得る。

すべてに共通の項目は当然ながらタンダール(クリザル)で、ゲームの当事者である父が最初に選んだカードが実は何であったかがはっきりする。クリゾフォルはジョーカーではなく、クリザルが隠れた「当たり」なのだ。そしてカードは誰も気付かないまま、もとの位置に戻っていた。この結末は、自ら交換を媒介した男(父)の一人相撲、孤独な戦いの物語へと転換される。奴隷に身を賣したとはいえ、息子の姿を見分けることができず、自己の迷妄に苦しむ男は悲劇的でさえある。彼は危うく、今度こそ永遠にクリザルを失うところだった。

手品の種明しはいつもつまらない。捕虜の老人や逃亡奴隷の証言、告白に左右される認知はいかにも偶然すぎる。《捕虜たち》には、《メネクムたち》、《ふたりのソジー》の人物らが味わった危機、狂気、彷徨がなく、デウスエクスマキナが指し示し、運命のみが導く交換の鮮やかな手際、妙手があるだけだ。しかしそれがくせ者である。ソジーの主人ですら侍女の証言なしに自分が誰であるかを言えなかったのだ。まして市井の父親である彼は。だからこの芝居でも、偶然は偶然でなく、運命は必然であり、デウスエクスマキナは運命という権力主体に支えられた制度の施行者、証言者で、他者として保証を与えてくれる媒介者の機能を担って登場する。彼らは権力または権力軸の動揺、混乱である戦争状態から忽然と姿を現し、タンダールには出生証明、自由人の気概を、フィロクラートには失われた制度的自由を回復してやる。無力な父親を使って行われた交換ゲームの正体は、既存制度の回復、権力構造の再生産である。父親は交換の主体たろうと努力するが、権力の領土を侵犯し、地雷を踏む。彼が爆破されながら囲い込んでいく権力のありようには唾然とさせられる。ごく少数の例外を除いて、自分で「自分」をもつことなどできない、「自分」は制度が与えてくれるものだというのである。偽りの、自己の再認。

解放された捕虜はどこへ帰るのか。メネクム兄弟、ソジー、タンダールはもう自分探しの旅をし

ない。自らを引き裂くロゴスとモラルの鉄格子に背をむけ、ひそかに舌を出し、何事もなかったように暮らすのだ。交換も解放も無用だ。カードは既に目の前にある。そして彼らは永遠にそれを裏返すまい、と心に決めているようである。いつまでも、喜劇の登場人物でいるために。

当時の観客はこれらの喜劇の結末を見て、身につまされただろうか。作者は恐れと哀れみ⁽⁹⁾を喚起する意志はなかったと思うのが普通であろう。それを狙うなら、喜劇の名を戴いていないはずだ。実際、ロトルーはいくらでも悲喜劇や喜劇を書いた。しかし一度手元が狂えば、プラウトゥスの登場人物らも別の悲喜劇、悲劇の人物のように悲惨な最期を遂げたにちがいない。境界線はほんのひとまたぎ、まばたきをする間に越えられる距離にある。ジャンルを越え、作者に対し、取り違え、変装、(役柄の)交換を容認あるいは強制する社会的コードがあったのかもしれない。以降で、今回曖昧なままやりすごしてしまったこれらのキーワードを再検討し、ロトルーの作品全体、特に喜劇について考えていきたい。

注

1) 戸張智雄、『ラシーヌとギリシア悲劇』、1967年、東京大学出版会、24頁

2) ウォルカティウス(前100年頃)はローマ喜劇を評価し、カエキリウス、プラウトゥス、ナエティウス、テレンティウスの順とした。

3) *Oeuvres de Jean Rotrou par Viollet-le-duc*.1967.T.I.

17世紀フランス演劇研究、《エイコス》、第9号、1995年、梗概

4) 例えば、『コルコスのアジェジラン』

5) アリストテレス、『形而上学』、出隆訳、1961年、岩波文庫、(上)169頁

6) *Viollet-le-duc*.1967.T.III.

鈴木康司、『RotrouのSosieとMolièreのSosie』、中央大学紀要、第59号、昭和46年

同、『下僕像の変遷に基づく17世紀フランス喜劇史』、昭和54年、大修館書店

7) アリストテレス、同上、(上)85頁

8) *Viollet-le-duc*.1967.T.IV.

《エイコス》、本第11号、1997年、梗概

9) アリストテレス、『詩学』、1452b

フランス演劇関係古文書資料一覧 : 1601—1606

戸口 民也

前回に引き続き、私がこれまでに実際に存在を確認した古文書資料を紹介しよう。前回同様、内容の詳しい吟味ができないまま、とりあえず紹介したものが多い。そのなかには、何かの手違いでマイクロフィルムが注文したとおりに届かなかったため、十分な確認ができないままになっている書類もある。しかし、大部分は読むのが難しすぎて transcription ができない、したがって正確に内容を伝えることもできないという単純な理由によるものである。そのため、“contenu”のところは空白ばかりになってしまった。人物についても、綴りの読み違いや見落としなどがあるに違いない。それらの点をご容赦いただきたい。

そうした不備にもかかわらず、あえて紹介するのはなぜかと言えば、演劇史研究の基礎資料がこのように存在すること、しかも私がごく限られた時間と条件のなかで調べただけでも、これだけの数の未確認資料が実際に発掘できたという事実を公表することの方が重要であろうと考えるからである。

なお、内容的には演劇とは直接関係ないかもしれないが、なんらかの形で芝居に、あるいは役者に関わっていたことがある人物が登場する資料も、すべて紹介することにした。たとえば、Fiacre Bouchet や Noël de France に関する文書がそれである。こうした文書も何かの役に立つことはあるに違いない。

今回は 1601 年から 1606 年までの文書に限定した。この時期は、これまでのところめばしい資料がほとんど無く、いわば空白の期間になっている。これから紹介する数少ない文書になかには document inédit がかなりあるが、そのうちの多くは先に述べた Fiacre Bouchet や Noël de France に関する文書で、つまり演劇には直接関係なさそうなものがだいぶ混じっているということである。

しかし、専門家の興味を大いにそそるに違いない文書も、数は少ないが含まれている。例えば 1602 年 3 月 18 日付けの文書 (document inédit) には Robert Guérin の名前が見られるし、また、私が昨年 (1996 年) 夏にアンジェ Angers 市に滞在した折に発見した二つの文書 (1600 年 3 月 22 日および 1606 年 2 月 9 日の文書) は大変貴重な資料である。とくに、1600 年 3 月 22 日付けの文書 (最後に補遺 appendice として添えることにした) には、Mathieu Lefebvre (Laporte) や Fleury Jacquault (Montfleury) とともに Alexandre Hardy の名前が記されており、本人の署名ま

である。Hardyに関する直接的な資料としては現在までのところこれが最も古いものになるだろう。また、この文書の発見によって、たとえば Deierkauf-Holsboer 夫人が *Vie d'Alexandre Hardy* においてこの時期の Hardy の活動について（確たる資料も無しに）主張していることが大幅に修正されるはずである。この問題については、いずれ機会を見て発表するつもりである。

**Répertoire des documents relatifs à la vie théâtrale en France
de 1601 à 1606**

Date : mardi 10 avril 1601

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 10 (Registre) ; Folios IIcXXI (221) recto et verso, IIcXX (220) recto.

Contenu :

Personnes concernées : Fiacre Bouchet, Noël de France

Notaires : Cuvillyer, Muret

Note : Document inédit.

Registre つまり装幀されて保存されている。文書は日付順に最初から最後に向かって並べられているが、フォリオ番号は逆順、つまり最後の書類の最後のフォリオ（紙）の表にローマ数字で I という番号が付けられ、前に 1 枚フォリオをめくるとに II、III、III（あるいは IV）・・・という具合に番号が付けられている。なお、フォリオの裏側にはフォリオ番号は付けられていない。

Noël de France の名前は文書最後に追加された書き加え部分で言及されているが、文書本体には彼の名前は記されておらず、また彼の署名もない。

Date : mardi 18 décembre 1601

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 12 (Registre) ; Folio VIIcLXXII (772) recto et verso.

Personnes concernées : Vaspazien Brosseron, Jehan Courtin, une autre personne (signature illisible)

Notaires : Cuvillyer

Note : Document inédit.

フォリオ番号は逆順。

Date : 18 décembre 1601 (?)

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 12 (Registre) ; Folio VIIcLXXI (771) recto.

Contenu :

Personnes concernées : Vaspazien Brosseron, Hubert Boyvin (Bouin?)

Notaires : Carrier, Cuvillyer

Note : Document inédit.

フォリオ番号は逆順。日付無し。前の文書 VIIcLXXII (772) recto et verso に添付されたものという感じ。

Date : lundi 11 février 1602

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 13 (Registre) ; Folios CII (102) verso, CIII (103) recto et verso, CIIII (104) recto et verso.

Contenu :

Personnes concernées : Noël de France (maître tailleur d'habitz), Jehan Cyve (Chive?, tailleur d'habitz)

Notaires : Carrier, Cuvillyer

Note : Document inédit.

フォリオ番号は正順。CII (102) verso の真ん中までは前の acte で、この文書はページの終わりの部分から書き始められている。またこの acte は CIIII (104) verso の半ばで終わり、その後から次の別の acte が書き始められている。

Date : 18 mars 1602

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 13 (Registre) ; Folios IXxxII (182) verso, IXxxIII (183) recto.

Contenu :

Personnes concernées : Robert Guérin et ses comédiens français (Mathieu Rube?, Loys ??, ????, Denis? Fontaine)

Notaires :

Note : Document inédit.

2 ページ目 (IXxxIII recto) が注文したマイクロフィルムに収められていなかったため、欠落。

Notaire が Cuvillyer であることはまず確実と言えるのだが、オリジナルを再確認する必要あり。

Date : 4 octobre 1602

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 13 (Registre) ; Folios VcLIX (559) verso, VcLX (560) recto et verso.

Contenu :

Personnes concernées : Fiacre Bouchet, ?? Jounyn ?

Notaires : Muret, Cuvillyer

Note : Document inédit.

Date : 19 décembre (6 décembre ?) 1602

Conservé à : Paris, Archives Nationales

Cote : Y 148, Folios (380) , IIIcIIIxxi (381), IIIcIIIxx (382) recto

Contenu : Contrat de mariage entre Mathieu Lefevbre et Marie Vénière

Personnes concernées : Mathieu Lefevbre (Laporte), Marie Vénière

Notaires : Belot, Fardeau

Note : Analyse dans: S. W. Deierkauf-Holsboer, *Le théâtre de l'Hôtel de Bourgogne*, tome I, Paris, Nizet, 1968, p.179.

マテュー・ルフューヴル（ラポルト）の妻の名前はこれまでずっと Marie Venier と綴られてきており、Deierkauf-Holsboer もそれに従っているが、むしろ Vénière と綴るべきだろう。というのも、契約書の本文には Vesniere と記され、また本人は Veniere と署名しており、これを現代風の表記に改めれば Vénière となるからである。

なお、Deierkauf-Holsboer この文書の日付を 1602 年 12 月 19 日としているが、文書の初めには 1602 年 12 月 6 日と読める日付がついている。また、文書の終わり近くには 1609 年 9 月 3 日という日付があり、さらに文書の最後には 1609 年 9 月 7 日月曜日という日付ではじまるテキストが続いている。テキストの読み取りは困難だが、このあたりは確認する必要あり。

ところで、1609 年 9 月 3 日という日付に関連してだが、この文書とは別に、まったく同じ日付の acte (document inédit) が Archives Nationales, Minutier central, XV,19 の中に存在することを私自身がすでに確認し、マイクロフィルムにも収めている。これについては次回に紹介するつもりである。

Date : 4 janvier 1603

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 14 (Registre) ; Folios XIII (13) verso, XIII (14) recto et verso.

Contenu :

Personnes concernées : Fiacre Bouchet et sa femme Nicolle Levasseur

Notaires : Carrier, Cuvillyer

Note : Document inédit.

フォリオ番号は正順。 XIII (13) verso の真ん中までは前の Acte で、この文書はページの終わりの部分から書き始められている。またこの文書は XIII (14) verso の半ばで終わり、その後から次の別の文書が書き始められている。

Date : 4 juillet 1603

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 14 (Registre) ; Folio IIcIIIxxXVIII (298) recto et verso.

Contenu : la somme de dix cens livres...というような文言あり。金銭の貸借についてか？

Personnes concernées : Fiacre Bouchet et sa femme Nicolle Levasseur, Jacques ?? (marchand bourgeois de Paris)

Note : Document inédit.

Date : mardi 19 août 1603

Conservé à : Angers, Archives départementales de Maine et Loire

Cote : 5E5,93

Contenu : Acte d'association des comédiens du roi

Personnes concernées : Jacques Robineau (La Bretonnière), Fleury Jacquault (Montfleury) et sa femme Colombe Vénier, Daniel Dugué (La Chesnaie) et sa femme Claude Piton, Léonard Dalanbour, tous comédiens du Roi ; Toussaintz Dallibert, Julien Bedeau, Callais Anquetif, François Bedeau, apprentis comédiens.

Notaires : Guillaume Guillot

Note : Transcription intégrale dans : 戸口民也「17世紀フランス演劇史研究ノート—1603年アンジェ : ある劇団協約文書をめぐって」17世紀仏演劇研究会『エイコス』第5号、1989年、p. 1-12. (ただし、編集上の手違いから、肝心の文書のテキストに誤植がいくつか残ってしまった。機会を見て、訂正版を公表するつもりである。)

次の文献も参照のこと :

Emile Pasquier, "Les Archives notariales d'Angers", in *Mémoires de la Société d'agriculture, sciences et arts d'Angers*, 6^e série, t. VIII (1933), pp. 5-22. Appendice III. Acte d'association des comédiens du roi, le 19 août 1603 à Angers (pp. 20-22).

Jacques Levron, "Les origines des Comédiens du Roi", in *Mercure de France*, No du 1^{er} janvier 1949, pp.91-96.

Raymond Lebègue, *Compte rendu de l'article de Levron*, in *Revue d'Histoire du Théâtre*, 1948-1949, IV, pp.292-294.

Date : 7 septembre 1603

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 14 (Registre) ; Folio IIIcXV (415) recto et verso.

Contenu :

Personnes concernées : Andrea Maloni (?), Filgiollo di Angola (?), comédiens italiens?

Notaires : Muret, Cuvillyer

Note : 内容不詳。演劇関係かどうか確認できないが、 comédiens italiens と読めそうな文言があったのでとりあえず収録。

Date : mardi 24 mai 1605

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 15 (Registre) ; Folios IIcXVII (217) verso, IIcXVIII (218) recto et verso.

Contenu :

Personnes concernées : Fiacre Bouchet et sa femme Nicolle Levasseur, un bourgeois de Paris et sa femme Anne Varset?.

Notaires : Muret, Cuvillyer

Note : Document inédit.

Date : vendredi 28 octobre 1605

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 15 (Registre) ; Folios IIIcVIII (408) recto et verso, IIIcIX (409) recto.

Contenu :

Personnes concernées : Fiacre Bouchet

Notaires : Cuvillyer, une autre personne (signature illisible)

Note : Document inédit.

Date : mercredi 4 janvier 1606

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 16 (Registre) ; Folios VII (7) verso, VIII (8) recto et verso.

Contenu : Promesse par Estienne de Ruffin à Valleran le Conte

Personnes concernées : Estienne de Ruffin, Valleran le Conte et sa femme Jehanne de Wancourt

Notaires : Muret, Cuvillyer

Note : Transcription intégrale dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Paris, Nizet, 1972, p.186-187.

Date : 12 janvier 1606

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 16 (Registre) ; Folios XXI (21) verso, XXII (22) recto et verso.

Contenu :

Personnes concernées : Fiacre Bouchet, Anthoine Fisque (?) masson (maçon)

Notaires : Muret, Cuvillyer

Note : Document inédit.

Date : dimanche 15 janvier 1606

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 16 (Registre) ; Folio XXX (30) recto et verso.

Contenu :

Personnes concernées : Fiacre Bouchet

Notaires : Carrier, Cuvillyer

Note : Document inédit.

Date : jeudi 19 janvier 1606

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 16 (Registre) ; Folios XLII (42) verso, XLIII (43) recto.

Contenu : Acte d'association de Valleran le Conte et d'Alexandre du Mesnil

Personnes concernées : Valleran le Conte, Alexandre du Mesnil

Notaires : Cuvillyer, une autre personne (signature illisible)

Note : Analyse dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Paris, Nizet, 1972, p.187.

Date : 9 février 1606

Conservé à : Angers, Archives départementales de Maine et Loire

Cote : 5E5,94

Contenu : Acte d'association des comédiens du roi

Personnes concernées : Fleury Jacquault (Montfleury) et sa femme Collombe Vénrière, Robert Guérin (La Fleur), Pierre? Janvier?, Nicolas Gasteau, Léonard Dallembourg (Dalanbour), Hugues Leroulx joueur d'instrument.

Notaires : Guillaume Guillot

Note : Document inédit.

なお、この文書の後には、同年同月 15 日の日付ではじまる文書（それぞれの取り分 part などを規定したもののようなものである）が添えられている。

Date : 3 mars 1606

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 16 (Registre) ; Folios CXII (112) recto et verso, CXIII (113) recto.

Contenu :

Personnes concernées :

Notaires :

Note : Document inédit.

マイクロフィルムを依頼したところ、手違いで、最初の 1 ページしか送られてこなかったため、公証人（Cuvillyer であることは間違いないはず）や署名人などの確認はできずにいる。

Date : 8 avril 1606

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : X, 2 ; Acte XXIX (29)

Contenu : Bail par la Confrérie de la Passion à Valleran le Conte du Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne

Personnes concernées :

Confrères : Charles Pouldrac, Sébastien Gauvyn, Nicollas Reveillon, Jacques Rouneau, Guillaume Javelle.

Anciens maîtres de la Confrérie : Achilles Bricés, Vespasien Brosseron, Claude Picollin.

Comédiens : Valleran le Conte et ses compagnons comédiens du roi.

Notaires : Haguénier, Huart

Note : Transcription intégrale dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Le théâtre de l'Hôtel de Bourgogne*, tome I, Paris, Nizet, 1968, p.178-180. Voir aussi : J. Fransen, « Documents inédits sur l'Hôtel de Bourgogne », *Revue d'Histoire littéraire de la France*, juillet-septembre 1927, pp. 329.

Deierkauf-Holsboer の transcription には cote は“fonds X, registre 2”と記されている。しかし X, 2 は、きれいに整理され、皮のカバーに入れられているが、綴じられてはおらず、実際には liasse (つまり装幀されず、ひとつひとつの Acte ごとに積み重ねられ、まとめられているもの) の形で保存されている。なお、この X, 2 は acte の並べ方、および番号の振り方に注意する必要がある。

(1) acte の並べ方 : 早い日付の文書が liasse の一番下に置かれ、あとは日付が新しくなるごとに、ひとつずつ上に積み上げられてゆくという形をとっている。

(2) acte の番号の振り方 : acte ごとに番号がつけられている。ただし、普通はひとつの acte はひとつにまとめてしまうのだが、この liasse では、1 枚の紙 (A3 サイズの紙を 2 つ折りにして A4 の 4 ページという形で使うのが基準) の中に二つの acte が収められていることがあり、しかも番号の振り方は一定しない。たとえば今ここで取り上げている Acte XXIX は 2 つ折り 4 ページの紙の最初の 2 ページに記されている。しかも、同じ紙の 3~4 ページには次の Acte XXX が記されており、こういう場合は 1 ページ目に XXIX の番号が、3 ページ目には XXX の番号が振られるわけである。そして次の Acte XXXI は新しい紙に記録されて、上に重ねられることになる。つまり、上からめくってゆくと、Acte XXXI の下に Acte XXIX がまずきて、そのすぐ下に今度は Acte XXX が続き、さらにその下には Acte XXVIII がくるというふうに、順番が狂うのである。ただし、そうならない場合もある。たとえば 2 つ折り 4 ページの 1~2 ページは Acte XXV、3~4 ページが Acte XXIV のような例もあり、この場合だと、番号は下から上に順序良く並ぶことになる。

Date : mercredi 3 mai 1606

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 16 (Registre) ; Folios IlcXIII (214) recto et verso, IlcXV (215) recto.

Contenu : Accord entre Valleran le Conte et Estienne de Ruffin au sujet du règlement

Personnes concernées : Valleran le Conte et sa femme Jehanne de Wancourt, Estienne de Ruffin

Notaires : Muret, Cuvillyer

Note : Transcription intégrale dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Paris, Nizet,

1972, p.188-189.

Date : 5 juin 1606

Conservé à : Paris, Archives Nationales, Minutier central

Cote : XV, 16 (Registre) ; Folios IIcLXV (265) verso, IIcLXVI (266) recto.

Contenu : Accord entre un cordonnier et Valleran le Conte, Estienne de Ruffin, Hugues Guéru au sujet d'une rixe

Personnes concernées : Valleran le Conte et sa femme Jehanne de Wancourt, Estienne de Ruffin

Notaires : Muret, Cuvillyer

Note : Analyse du document dans : S. W. Deierkauf-Holsboer, *Le théâtre de l'Hôtel de Bourgogne*, tome I, Paris, Nizet, 1968, p.180-181.

Appendice

Date : 22 mars 1600

Conservé à : Angers, Archives départementales de Maine et Loire

Cote : 5E5,91

Contenu : Acte d'association des comédiens du roi

Personnes concernées : Mathieu Lefebvre (Laporte), Jacques Robineau (La Bretonnière), Fleury Jacquault (Montfleury), Calude Husson (Longueval), Daniel Dugué (La Chesnaie), Alexandre Hardy.

Notaires : Guillaume Guillot

Note : Document inédit.

初めに述べたように、Alexandre Hardy に関する直接資料としては、現在までのところ、これが最も古い文書になる。

シュレナ
パルティアの将軍

悲劇

コルネイユ作
小林 卓 訳

ユリディス

登場人物

オロド、パルティア国王
パコリュス、オロドの息子
シュレナ、オロドの武官、クラッ
スと戦った将軍
シヤス、同じくオロドの武官
ユリディス、アルメニア国王、ア
ルタバズの娘
パルミス、シュレナの妹
オルメーヌ、ユリディスの侍女

舞台は、ユフラテス川のほとりに
あるセルシア

第一幕

第一場

ユリディス、オルメーヌ

賑わいやら結婚式についてたんと話すのは
お止め。私がどんなに悲しみにひしがれている
か、分からないの。オルメーヌ、二人の国王様
がご締結になった条約が、ここで実施されよう
としています。エカトンピール⁽¹⁾の城壁よりも、
セレウシアの城壁、この壮麗な宮城が好まれた
のです。王妃と姫宮も居場所を離れ、この美麗
な都市にやってきて宮廷の華として輝きを増
すでしょう。国王様がお二人をお呼びになった
のは故あってのことでした。宮様は、二人のご
到着を待つばかりです。これまで、こんなに美
しい飾り付けが、この地に見られたことはありません。でも、こうした用意や準備が、私にと
ってなんになりましょう。私の思いは人のもの
であり、思いの数々は、私の思い通りにはなら
ないのですもの。世間のうきうきした気分を引
き立てようとするどんな工夫も、私の胸には、
困惑と悲しみの種となるばかり。愛する人がい
るため。

オルメーヌ

あなた様が、姫。

ユリディス

オルメーヌ、私が耐え忍べる限りは、黙っていました。私を虜にした愛しい人に会えないと思っていた間、恋は私の胸中にしまわれていました。お会いできず、そのうえ、分別が働いて恋は消え去ったようでした。かなわぬ望みと思っただけです。この胸は平静でした。そして、私は義務感から、父上、国王陛下の命令に造作なく従ったのです。父上を選び給われた相手に。ところが、神々よ！ひどい難儀！あのいとしの方の目前で、式をあげねばならないとは！

オルメーヌ

いとしの方の目前で！

ユリディス

そなたに言わねばなりません。私がどんな不幸にうちひしがれ、誰に恋焦がれているかを。苦痛もうちあげれば軽くなるもの。そなたとともに慰めを求めましょう。ローマ軍の頭、貪欲なクラッスス⁽²⁾は、パルティアを征服しようとしたとき、そなたも存じてるように、父上の助力を求めた。数日後には、オロドも同じく、大使として、あの英雄、国王のために仇を打ち、王位に戻したあの英雄を遣わした。

オルメーヌ

その通り、シュレナ殿は、自分の国王のために交渉をし、クラッスス殿は、ローマのために同じ仕事を果たしました。強慢な国々が、アル

タバズ王⁽³⁾の支援を競って求めたのです。宮廷は、このふたつの利害関係によって二分され、大使の逗留も長引きました。

ユリディス

お二人とも、国王の他に私をも訪問されました。私は、すぐに二人の違いに気づいたのです。一方は、傲慢で国王への根っからの侮蔑感でのぼせ上がり、お世辞を言いながらも、その実、私たちを隷属しようとしているようでした。もう一方は、然るべき敬意を払って、私たちの王位のために無礼をたしなめたのです。そこには、恋心さへ混じっておりまして。その話しぶりは心の内を示すようで、私にも同じことを求めているようでした。彼は、私の心をかち取ったのです。あの方を目にして魅了された私の眼は、即座に彼の目と密かに打ちつけてしまったのです。言葉にならないもの言いは、彼に隠そうとつとめていたことをよけいに彼に教えたのです。そして、彼の恋心を私に示した同じ視線が、私の眼差しから私の心の奥の秘密を盗んだのです。彼の思いのたけは、私の胸のうちで同じように優しい想いと出会ったのです。思いもかけなかった意気投合に、私たちの恋心も一つとなったのです。たまたま漏れた甘い一言故に、二人の心はすっかり信じ合ったのです。

オルメーヌ

でも、シュレナ殿は王でありましょうか？
姫君。

ユリディス

いいえ、違います。でも、国王の領地を安泰にする方です。パルティアで、知恵もお顔も最も優れた方。一番の富、最高の勇気を持ち、最も高貴なお方。さらに、私への愛。それは、王にすぎない王に十分匹敵するものです。私が恋にのぼせてるからって気を悪くしないで。私の苦しみを語り終わるのをじっとお聞き。

交渉に手間取ったために、儀礼上の交際という体裁のもとに私たちの愛は、進んだのです。あの方が様々な心遣いをするのをだれも不思議とは思いませんでした。とは言え、パルティアかローマかどちらかを選ばねばなりません。父上には、ローマに味方する理由がおり、私には他方を選ぶ別の理由がありました。話しても無駄でした。私の言い分は聞かれず、こうした物事にかんしては、私の意見など重きをおかず、考慮もしないのです。つまりは、ローマの側についたのです。シュレナ殿は、面くらい、由なき拒絶という恥辱を忍んだのです。私には、お腹だちになったように見えたが、表へは現しになりませんでした。ただ、二人で嘆いただけ。あの方の胸の内は、私のものでしたので、別れも敵として別れたのではありません。消え去った望みなど思っても、どうなりましょう。父上の選択は間違いでした。その後の成行が示しました。シュレナは二人のクラスス⁽⁴⁾を滅ぼし、オロドは、わが軍に対して優勢となり、雷鳴のように、わが国に襲いかかってきました。この戦争がどんな災厄をもたらすか、かねて覚悟の上でした。でも、災厄の一つが、和平のために私が忌まわしい幸福を受けることだったとは、思いもかけないことでした。二

人の王様は、和平を結ばれ、私が犠牲とされた。高貴な王子様が、私のもとに結婚のためにいらっしゃいました。王子が優れたお方であることを、知らないわけではなかったのです。素直な心でみれば、愛されるはずのお方。でも、私の心は真っ白ではなく、他の人が占領していたのです。王子様がお持ちのたくさんの美德、長所が心に触れても無益なことでした。愛するに価する宮も、目には煩わしいばかり。宮がどこにも傷のない完全な方でいらっしゃるだけ、益々煩わしいのです。とは言え、私は従いました。オルメーヌ、宮と結婚します。それに加えて、、、

オルメーヌ

まだ、何かおありなのですか。

ユリディス

嫉妬に身を焦がして。

オルメーヌ

嫉妬ですって！ 何という不幸の極み、本当におかわいそうなこと。

ユリディス

私が何に苦しんでいるかおわかりだね。では、私の恐れてることをお聞き。オロド王は、娘の姫宮をお連れなさいました。王が、私の持参金で富を増し、二つの結婚式で同じ日を祝おうとしてるとしたら、私の辛さがどんなか思ってるがよい。おまえには、恋を打ち明けたんだから。

天よ！愛する人の目の前で、他人の手に渡る

だけでも耐え難い。愛する人が人のものになるなんて、さらに辛い目にあわせてくださらぬよう。

オルメーヌ

姫、それは余りにも思い過ぎしと言うもの。

ユリディス

不幸な目にあい始めると、どんなことも恐れおののくものに写るのよ。ありもしないことに見えようと、不幸な者には不安の種。予見したり、思い描くこといっさいが、悩む心には毒のようになる。

オルメーヌ

その次々と注がれる毒に、酔っていないさるんですね。ありもしない結婚までも、毒になさってるんですから。

ユリディス

姫宮がお呼び立てられました。姫宮がいらっしゃいます。姫宮は美しい。ローマ人の征服者は、姫宮にただふさわしいばかり。姫宮にお会いなさり、姫宮とお話なさり、その上、陛下が望まれるならば、、、言葉が過ぎました。もう私の心は惑いに惑い、、、

オルメーヌ

根も葉もないことを確かなものと考えお心を、苦痛を除く方向に振り向けるのですよ。どのようにすれば、心痛が和らぐかお考えください。

ユリディス

出来る限りのことはしましたが、和らぎはしなかった。私の想いを占め、おそらく私を打算的と思っておられるシュレナ殿にお会いしたいと思って、妹の君と親しくなりました。妹君に兄上の面影を偲び、嬉しかったのです。でも、軽く弱々しい楽しさ。私の恋を隠さねばならない無用の気遣いのために、煩わしくもあったのです。妹の君は、きっと私の心の内をご存じです。彼女は私に打ち明けるように求めるそぶりをしますが、私の義務を思うと赤面してしまいます。兄上も、妹の君を愛してらっしゃいますから、隠し通しは出来ますまい。そなたも、同じことを致すではない。もっと私の身になっておくれ。そなたのおかげで、私の心痛が少し軽くなりさえすれば、でも、そなたは殿について何も語ることはない。殿が何をなさっているか、何をお考えか知りはない。そうした話には、妹の君がかなってる。殿が私を非難なさってるか、私の不幸に同情されてるか、わたしの苦しみを共にされてるか、それともお笑いになってるか、殿から盗みとった者の共犯者と私を見てなさるか、心を私に預けて下されているか、私をきびしく裁かれてるか、妹君はご存じだ。妹君がやってこられる。出来ることなら、無理にでもお話をさせなさい。必要なら、何もかも白状するよう、私を強制なさい。偉大な神々よ。そんな大胆なことを私がするなんて。いや、出来るかしら。

オルメーヌ

愛は、そう望めば、いつも大胆不敵になるものです。欲望が自分を抑えきれなくなったとき、自ら大胆になり何もかも隠し事を持たなくなるものです。

第二場

ユリディス、パルミス、オルメーナ

パルミス

王女様、嬉しい知らせを持って参りました。王妃様が、今宵、お越しになります。

ユリディス

マンダヌ姫⁽⁵⁾も一緒に？

パルミス

間違いございません。

ユリディス

シュレナ殿は、喜んで満足げにお待ちなのでしょうね。

パルミス

兄上は、王女様が受けるべきしかるべき敬意を払って迎えております。

ユリディス

それだけ。

パルミス

臣下たる者が、それ以上の何を払うのでしょ

う。

ユリディス

私は何でも知りたがるのです。従臣は、王族の姫君にどんな義務を持つてるのか知ることができればとでも思ったのです。国家の礎となるような従臣は、ほかの者からは抜きんでております。殿はそういう一人ですし、私の見るところ、それほどの恭敬は必要なくはと思ってみたりもするのです。

パルミス

その点については、よく心得ません。姫、兄上も、そのような微妙な礼儀について私と同様明るくないと思いますが。

ユリディス

話を進めましょう。王子は何をされています。

パルミス

王子が真に恋する人として、天にも登るようなお気持ちにないともお考えなのでしょうか？ 殿のご幸福に、何か影がさしたりしましょうか。お望み通りの幸せをつかむ寸前なのですもの。

ユリディス

王子にとっては、大きな幸せではないことよ。姫、気に障ることがあるのではと心配してるのです。

パルミス

身も焦がす情熱が遅滞なく嬉しくも満たされるというのに、どんな嫌な苦味があり得るのでしょうか？あの様な幸福を乱すどんな心配があるというのでしょうか？あなた様のお手を得られて、、、

ユリディス

手と心は別です。

パルミス

王子は、あなた様のお気持ちを掴んでおられます。

ユリディス

いいえ、違います。姫、王子が私の心を得られるかどうかさえ分からないのです。さあ、王子の幸福がどんなものか考えてごらん。でも、止めましょう。お願い。何もかも包み隠さず話しましょう。私の秘密をご存じね。

パルミス

兄上の秘密は知っております。

ユリディス

それでは、私のもご存じのはず。シュレナ殿は、義務に従っておられるのかしら？或いは、私を恨んでいる？お怒りになるのはごもっとも、でも、私のものを怨まずにお返し下さいますでしょうか。

パルミス

もちろんですとも、お姫様。偉大な心が、も

っとも偉大な才人に負っているもの、情熱と恋を、あなた様にお返しします。

ユリディス

まだ、愛してくださっているとは！

パルミス

愛するというもおろか。苦しみながらも、不平不満を洩らしたりしません。私がいくらあなた様を非難しても無駄です。兄上は、自分であなただ様をかばい、絶えず弁護します。

「あの方は、娘の身であり、さらに王女でいらっしゃる。父親の権利、国王の権利を私は知っている。王女が義務とする背くことの出来ない掟も、幼少のみぎりより、姫君の身分と生まれが、その願望を縛りつけてきた厳しい規律も、心得ている。その胸には、愛や憎しみもよぎらないではない。だが、たとえ愛そうと、憎もうと、従わねばならない。姫君は、自分の思いになるものを私に下された。それだけで、私は永久に感謝せねばならない。」

ユリディス

嬉しいお話をしてくださること。おかげで、王子への憎しみも、愛しい人への想いも倍になったわ。おしまいにしましょう、姫、こんな不幸な目に遭って、憎しみが募るほど苦しみも増し、愛が深まるだけ、一層苦しいのです。

パルミス

悩みをかき立てなさいますな。話は変わりますが、あなた様の秘密を私は知ってますが、私

の秘密をもお知りください。この栄えある婚姻に於て、運命の神がとこしえの苦しみを与えられたのは、姫君一人ではございません。王子様、、、

ユリディス

お願い、その名前を口にしないで。名を聞いただけで、私には死ぬようなおmoi。

パルミス

まあ！あまりの憎しみよう。

ユリディス

それはただ、王子に会うと死ぬような苦痛を覚えるためなのです。

パルミス

なるほど、姫宮様がお嫌い給われるかの王子様、あなた様の気持ちが浮かび出ずにおられないお方、あなた様を愛しておられる王子様は、かつて私を愛したのです。

ユリディス

不実な方ね！

パルミス

私たちは、同じことを願い、相思相愛でした。私も愛していました。

ユリディス

そんなに優しい結びつきを破るとは、恩知らずね。

パルミス

お姫様、あなた様にさからえる心があるでしょうか。どの様な恋も、恋の誓約も、あなた様のためなら犠牲とされるでしょう。恩知らずにも私を裏切ったとしても、あなた様の美貌が弁護するのです。姫のお美しさははるかに私を凌ぎ、、、

ユリディス

王子を失っても、姫、あなたはあなたに変わりないのです。自由であることを思えば、約束を反故にされたことも容易に慰められましよう。でも、私に自由はないのよ。愛する人を失いながら、ほかの人のものになるのが、私の不幸なのですから。

パルミス

お姫様、私の方が好運だとおっしゃるのです。あなた様は、愛する方を失われました。でも、その方の心はあなた様のものです。私の場合、恋人とその心の両方を失うという不運を味わいました。あなた様は、ますます多くの虜をつくれるのに、私の虜は失せてしまいました。あなた様は、私の手から抜けでたものを捕らえてしまわれました。あなた様の領土は広がり、私の領土は消滅してしまいました。私の誉れには、何一つ残っていないのです。

ユリディス

あなたの虜を再び手にするのです。あなたの征服したものを確保なさい。最も偉大な人物に

あなたの掟を揮うのです。私は妬いたりしません。百人の王よりも、私の甘美な情熱、私の想う人の輝きを好みます。シュレナ殿の求愛は王冠よりも値打があります。でも、姫、殿は本当に私を愛してくださるのですか。おっしゃってくださらない。もしそうだとしたら、なぜ私の目をお避けになるのでしょうか？

パルミス

お姫様、兄上が参りました。、あなた様に一層よく説明することでしょう。

ユリディス

あ々、あの方を目にするだけで、私の心はせつない。愛の神よ、もっと私の心に勇気を与えてくだされ！

第三場

ユリディス、シュレナ

ユリディス

二度と私にお会いにならないようにとお願ひ申したはず。殿、あなたが目の前におられては、私のつとめは果たせません。私にとってこの上ない逸楽であったくさぐさのことが、今では次々と拷問となるだけ。それをあえて無視なさるのでしょうか？私があなたに拝顔すると、つらい苦しみにあえぐというのに、でも、あなたはそれほどではないのでしょうか？共に苦しみ嘆けば、私たちの辛さは減るものでしょうか？さあ、私が懊悩の極みにあることを知った

だけで十分ではございませんか。少なくとも、辛うじて胸の内を抑えてる人を憐れんで、恥ずかしい告白などもう強くないでください。

シュレナ

あなたにお目にかかることが、私の心にどんなに負担となるか存じておりました。しかし、死のうとするものは毒を求めねばなりません。姫宮、時は迫ってます。明日、あなたのされる貞節の誓いは、私を忘れることを永久に命じるのです。私にとって、この日、この一瞬の命しか残されていません。あなたに捧げた愛にお赦しのほどを。最後の飲びとして、あなたの膝元に、あなたの捕らえた心が恋の吐息を漏らすことをお忍び下さい。

ユリディス

私の心がそれほど強いとお考えですか？殿、この一瞬が勝利をおさめ、あなたの寿命を断ち切るその吐息が、同じく私の命の衰れな行く手を断つことを、少しもお心配なさらないのですもの。死んではなりません、殿、生きるのです。私が衰え果てるために。私が長い時をかけて衰えゆき、あなた様の恋の強さがいかほどであったかを示すため。あなた様の目の前で死ねれば、私には過ぎた喜びであると思えるでしょう。私はまだあなた様のために十分苦しんでおりません。黒い怒りの汁がゆっくりと私を焼き尽くすこと、その苦い汁をたっぷり味わい尽くそうと思ひます。死の助けを借りずに、とこしえに愛し、とこしえに苦しみ、とこしえに死にたいのです。ところで、このもの苦しくも

宿命的な想いに免じて、心弱い私の願いを聞き届けてくださるでしょうか？ 殿、ささやかな幸福によって、かくも身を斬るような辛さを和らげて下さいますでしょうか？

シュレナ

哀れな者にどのような幸福を与えられますよう？このように御愛顧をいただき、愛だけでも圧倒されるおもいです。このような私にでも、何かできることがございましょうか？

ユリディス

あなたはひどい苦痛を取り払ってくれます。マンダヌと結婚なされますな。彼女が呼ばれたのは、意図あつてのことです。心配したり、あれこれと疑ってるうちに、すっかり信じ込んでしまいました。あなた様が、私を意のままにする人たちの血族となる、私に残されたただ一つの財宝が他人の手に渡るのを見るという悲運を、殿、私の大きな不幸にお加えなされませぬよう。財宝とは、あなた様のお気持ち。それが奪われるとは、余りにもむごい。それだけは私のものであってほしく、パルティアの王様に逆らっても、私のものとなり得ぬ御手を、せめて私が指図したいのです。

シュレナ

私たちのように、純粹で、強い愛にあふれて、マンダヌに目もくれず、ほかの一切の女に目をくれず、というのも私には他の女に目を向けようがないからですが、私には、他の者に与える想いのたけも、求婚する手もありません。あな

たを愛しながらも、得られないのです。ですから、姫宮、わが胸が堪え忍べるような婚姻などありえましょうか？ 姫に大層懸想された男の幸福が見つかるような縁組み、姫の強い愛のために、天下に愛すべき者を見つけられなくなった男を幸福にするような結縁があり得るでしょうか？

ユリディス

あなた様に求めているのは、殿、そのようなことではないのです。後世のために、あなたは子孫を残さねばなりません。あの名高き死者達は、殿が今世その代わりを為されておりますが、誉れ高き血筋のうちに生き返らねばなりません。私は、その血筋を消そうと思いません。もしそうした願いをほんの僅かでももつようなことがあったら、大逆罪を犯したと見なすでしょう。

シュレナ

私と共に一切が減びるがよい、姫宮、私の死後、私を支えた大地を誰が闊歩しようと私には問題ではない。かの名高き先祖も、漆黒の墓に新しい光が射すのを感じることがあるのだろうか？ 彼等が生き返る所は、たぶん先祖の範に従えず、先祖の面汚しとなるばかりの、ただ墮落するための血筋を持った子孫どもが生き返らせる場所ではあるまいか？ われわれを照らす日の光が消えたときには、死後など絵空事に過ぎない。一瞬にせよ望んだ幸福を手にすることは、冷たく虚しい永遠に優る。

ユリディス

いいえ、いいえ、そうではありません。私は嫉妬に身を焦がしてるのです。私の愛をどうしても守りたいという切迫した思いは、あなたが約束を守っておられるのを見ている限り、王の意志に屈した愛に過ぎないと信じていらしましょう。マンダヌはいつでも思いのままにあなたの気にいることが出来ましょうし、そのことは彼女との結婚を意味するのです。私は心苦しく絶え間なく震えおののく理由があるのです。私の苦しみが増していくだろう限り、別の婚姻が私を安堵させねばなりません。出来れば、それには無関心でいて下さい。たとえ、新しい情熱によって私を裏切ることになろうとも、あなたは、私に従うために愛したのだと願いたいのです。その大なる結合は私がなした最後の大業であり、それは殿の私への永遠の臣従の代わりであり、私こそが命令を果たし、一言で言えば、私こそあなたの心と運命の女王でありたいのです。

マンダヌは、周囲に唆されてはいるものの、あなた様のたかみには上がれず、あなたが意のままに支配する衰れな王達のもとに降らなくなるようにしたいのです。マンダヌを失ったからといって悔やんだりなされますな。天下にあなた様を受け入れない宮廷などございませぬ。あなた様の栄光は至るところに知れ渡っており、王女に不足することはありますまい。

シュレナ

たとえ王女達が私を全世界の主に、地に於て絶対、海に於て至上の者にしようとも、わが胸

の想いは、、、

ユリディス

続けてはなりません。あなた様のご様子を伺うと、私の悩みをいささかとも減ずることはないでしょう。なおも私の力のもとにしようとする心からは、ただ服従のみを私は欲しているのです。

シュレナ

私を誰にお与えになさるおつもりか。

ユリディス

私がですって？ ああ！ 何故マンダヌからあなたを取り上げ、あなたを誰にも渡さないということが出来ないのやら！ あなたを愛する我が心中に巣くう疑いに抗して、何故自ら安堵の境地に至ることはかなわないものか！ お別れです。取り乱してしまいました。

シュレナ

天よ、救いはどこにあるのだろうか。とこしえに、愛し、苦しみ、死なねばならないとは！

第一幕終わり

第二幕

第一場

パコリュス、シュレナ

パコリュス

シュレナ、そなたは父上によく尽くしてくれたので、これ以上遺漏のない忠義があるとは思えないほどだ。それがしにうれしかるべき婚姻を目前にして、我が心を打ち明け、我が望みをそなたに託そうと思う。パルミスが、この結婚に不平不満を漏らすのはもっともなこと。しかし、姫君への損失は償うつもりだ。そなたも承知のように、かくも高貴な縁組をするには、われわれのような身分の者は一切が意のままになるわけではない。そなた達二人が婚姻を結ぼうとするなら、パルミスには国王が、そなたには王女が幾らもいよう。私はきっぱりと約束するが、汝らが私や国王に飽き足らなく思うようなことはない。

シュレナ

殿、私を金のために仕えているような扱いはお止めいただきたい。私がお仕えているのは、報償目当てではございません。荣誉だけで十分でございます。それが受け取る褒美、、、

パコリュス

人が務めを果たしたとき、それがしがすべきことはわきまえている。そなたが高き心を持って固辞しようとも、我が心は褒美をとらせたいのだ。それがしはユリディス王女と結婚する。姫宮は、優美な才智と優艶きわまりない身体が絶妙に調和し、この上なく輝かしい、高貴な御方でいらっしゃる。それは魂を美しく飾り、お顔を飾っておられる。ただこれだけにとどめよう。その魅力の程は、そなたが十分知っていよ

う。姫宮と面識のあるそなたのことだ。かくも美しく欠けるところのない王女が、私の極まるどころのない望みを共になされないのでは、愛してはいないのでは、あるいは、姫宮の想いは、私の願う方向とはすっかり外れているのではと恐懼しているのだ。そなたは、姫宮に何度も会い、また、仕事柄姫宮とその国王の傍らに長く逗留していたのだから、どうか、隠さずにそれがしに話しておくれ、あの宮廷でこのような事柄について何か見聞したようなことがあれば。

シュレナ

殿、王女様に何度もお目にかかりました。とはいえ、父上の心をかち取るためにです。それが、私の職務であり、ただ一つの仕事でした。姫宮の助けで、我が方を選ばれると信じておりました。だが、ローマとその陰謀術策の方が勝ったのです。おまけに、殿に利害のあることのみに関心を払い、この職務に没頭しておりましたため、他の人なら見聞したことでさえ、見過ごしたかも知れないのです。戦争終結後、かたじけなくも姫宮が殿のご愛情をえられることを予見していたならば、いろいろと心配りもし、詳しく観察もしたでしょう。私は命令に従うばかりで、何も見抜きはしなかったのです。

パコリュス

なんたること！それがしが心配していることについて、いささかの見当もつかないとは。ある仲立ちを介して、姫宮に求婚したものはいないのか？姫の側にいた殿の誰か、有能な家来

の誰一人として、しげく出入りをした者はいないのか？というのも、我が宮廷にも、奥深い田舎から王子というに匹敵する家来どもがよくやってくる。感情と言うものは、目の前の事物によってかき立てられるものだから、見もしない王をいつまでも待つものではない。

シュレナ

私の滞在中、私の目に触れるものは何もございませんでした。頻繁なご訪問も、由ありげな精勤も、もし私が愛してたなら嫉妬しないではいられないような楽しげな交歓も、ありません。一体、なぜそのような故ないご心労をされるのですか？殿。

パコリュス

姫宮に会うほど、自分を抑制しているのが分かるのだ。私が敢えてお側に近づこうとする途端、姫宮には私に触れさせたくない何かがあるようなのだ。なるほど、これまで婚姻の延期を求めてきてはいない。だが、私を愛してるからではない。ただ従っているだけだ。私が受け取れる精一杯のもてなしも、私が得られるものは、ただ義務から出たものなのだ。

シュレナ

ご心配なされますな。ただ結婚という名前だけで仰天し気懸かりに震え、故郷の思いにふけり、ご両親の思い出に胸ふさがり、姫宮のお心にはたくさんの方々な不安が去来してるのです。

パコリュス

姫宮を拝顔すると、心痛のせいかな、公の祝い事を無みされようとしているかのようだ。不安げで、物思いにふけり、万事うまく運び愛が二人の心に注ぐ甘美なかたりに気をも留めず、、、

シュレナ

結婚の約束が果たされて、あなた様の御手にその手が委ねられたら、そうしたことはいっさい消えるでしょう、殿、そのような心配事は一日足らずに消え失せ、姫君の徳は愛に変わるのです。

パコリュス

そのような浮いたぐらついた望みを頼りとするのは、余りにも危なかしい。それがしが、姫宮の固い貞節に全てを頼らねばならないとしたら、この愛情にどんな幸福な、めざましい所があるというのか。冷やかな結婚がもたらすものしかないとしたら、むごい命令にいやいやながら従い、二人を結ぶのは結婚の取り決めただけだとしたら、こんな愛にどんな陶醉があるものか？命令によって愛が芽生えるとするのなら、婚姻とは、ただ廉恥心を取り除くだけのことに過ぎない。歡び合うためには、強制なぞあってはならず、すべてを与えようとする者には、甘く楽しい語らいがあるのみ。大いなる神々よ！我が甘い情けが、王女の内により一層いとしい想いに会おうとしたら、一体なんとしよう。他の人に向けられた心がその人を断ち切れなしいとしたら、我が腕に抱かれながらも、他の男の恋に悶えているとしたら？とにかく姫宮と

話をせねばならない。

シュレナ

殿、姫宮がいらっしやいました。よい機会です。もしあなた様のご心配を裏付けるようなことがありましたなら、どうなされますか。

パコリュス

それを懸念してるのだ。そなたには何も偽わらないが、それがしにも自尊心はあるから、姫君を問いつめたりはしないつもりだ。しかし、我が心の傷が深いあまりに、姫宮を罰しようがために妻とするようなことがあるかもしれぬ。愛する者は袖にされると、恋仇の幸福をぶち壊すだけでも大した事をしたと思ひ込むものだ。姫宮がお近づきになられた。では、一人にさせてほしい。そなたの前で、恥をかきたくないのな。

第二場

パコリュス、ユリディス

パコリュス

これは、姫宮、自ら私にお会いにいらっしやるとは！姫のご愛顧が私にお見せになったお優しい心遣い、、、

ユリディス

パルミスを探していたところです。差し迫った、取り返しのつかない不幸をお慰めしたいと思ひまして。

パコリュス

もっと緊急の用件についてお話させて下さい。もうあなたの心を打ち明けるときではありませんか。これ以上胸の内をお隠しなさるのは、罪と言うものです。私はあなたを愛してる。明日、私たちは婚姻で結ばれる。私を愛しておられますか？

ユリディス

もちろん、殿、私の手はあなた様のものです。

パコリュス

心が伴わなければ、手などとるに足りない。

ユリディス

誰も伺えないほどの微かな不平を漏らしているとしたら、それは一体どんな訳があつてのことなのでしょうか？

パコリュス

どうか、姫君！それがしにはもっと率直にお心のうちを。

ユリディス

私とご結婚下さい、殿、私は静かに放っておいて頂けませんでしょうか。そんな疑いをかけられるとは、腹も立ちます。そのような勝手気ままは、時には率直を過ぎたものしか得られぬものです。

パコリュス

それこそ願っているのです。私の望みが正し

かったのか、あるいは恐れが正しかったのか、今日、お打ち明けになる憚りのない言葉ではつきりするのです。私が、あなたについてどれほど想いのたけをめぐらしているか、ご存じになったら！

ユリディス

従順な心のなす事を、私の義務が命じること、殿の恋が待たれることを、つまりは、私のなすべき事をする決意です。

パコリュス

それ以上のことをされるはずです、姫君。私をお許しください、二つの心がただ一つの欲望しか持たないことを明かしてお喜びになるはず。あなたは、絶えず語られる。「そう、宮、愛しています。それもあなたと同じく切なる恋に駆られ、同じ情熱に燃え、同じ願いを持ち、あなたの望みは私の求めるところ、このしるけき熱情も、栄えある結婚が二人の期待を満たさない限り、満足されはしないのです。」

ユリディス

殿、あなた様とこれほど打ち解けたお話をするには、私もあなた様と同じくらい愛に通暁していなければなりませんでしょう。

パコリュス

真実の愛は、心に芽生えるや、一瞬にして愛の言葉を学ぶのです。そうした物言いは、恋に邪魔になりはしません。もしご存じないとすれば、恋の何物もお感じになっていない。

ユリディス

その埋め合せをなさって下さいませ、殿、ご自身で、ご自分に、恋する心が愛した途端、語るべきことを言って下さいませ。私の代わりに、甘い語らいをなさってくださいませ。私が口に乘せないのならば、どんな事でも認めるに吝かではありません。

パコリュス

実に明瞭な言い方だ。造作なく理解しました。愛はないとしても、もしや憎しみをお持ちなのでは？そうは思いたくない、こんなにも美しい眼、、、

ユリディス

殿、あなた様への私の気持ちをお聴き下さい。信義があなた様の心にかない、あなた様が敬意を尊重なさるのならば、それを拒んでは罪と言うものでしょう。ただ心に関しては、あなた様になにないに申し上げるならば、それはまだあなた様のものになっていると思えないのです。

パコリュス

さようならば、では、二人の王が結ばれた協定は、、、

ユリディス

私たちの身が、双方の王位に関わるとしても、それは、ただ手を与えることに限られるもの。私の心が、あなた様と協力して協定を結んだものではございません。心をあなたに向けてもつと

優しく、もっと感じやすくしようと私が全力を
尽くす義理をあなたに持ってはいないのです。
時が私の心をそう仕向けるかどうか存じませ
ん。どちらにせよ、あなた様は私を妻に出来る
のです。

パコリュス

出来る、せねばならぬ、欲している。けれど
も、姫宮、私の恋にずいぶん冷淡な対応をされ
る。もしや、他の強い愛が、、

ユリディス

いったい何をお求めで、王子？

パコリュス

私の幸福に関わること。

ユリディス

私の口から洩れ出るような言葉があるとも
も？

パコリュス

それは漏れ出たも同然、というのも他の愛と
いう言葉があなたの胸に応えたのですから。も
しあなたが、心を他の者にお譲りになっていな
かったならば、もっと躊躇なく否定なさったで
しょう。私が察じてることを打ち消すために、
私の要求に喜んで返事をされたかも知れませ
ん。姫宮、恥も悔恨もなくなすことは、言うに
価しないことです。何の緊張も要せず、顔が赤
らむこともなく、、

ユリディス

何も、私のために恥じ、赤面したのではない
のです。もし私がつれあいを選べるものなら、
堂々で行い、その誉れを墓場まで持ち込んで
しょう。私があなた様の求めに応じるときには、
私が生涯それを誉れとすることを、当然あなた
様は信じるはずです。私が赤らんだのは、あな
た様の故にです。人が自ら認めるに難儀をすべ
きことを憚らず要求されたのですから。私があ
なた様と睦言を交わすことお求めになってお
られます。あなた様は、義務から受け入れられ
た婚姻を前にして、このことをあまりに詮索し
すぎるのは差し控えられるべきでございまし
ょう。

パコリュス

決定はなされたのです。しかもかたくなに沈
黙を守り、これほど謎めいた言葉を使われるの
です？

ユリディス

それについて申し上げることはありません。
もしあなたが私を強いて言わせようとされ
るなら、それはあなたが思ってる以上に高く
つくでしょう。

パコリュス

さようですか、姫宮、そうですね、どれほど
高くつこうとも、知りましょう。私が恐れねば
ならない恋仇は、どんなお人かな。おっしゃて
ください、英雄か、宮か、王なのか。

ユリディス

私の知る限り、私に最もふさわしいお方。

パコリュス

その勲功は大であろうと、些か行き過ぎの敬意。

ユリディス

胸を乱す愛に免じてお許しを。あなた様が強いられます故に、慎みを欠いたとしましても、あなた様がそうさせたのです。愛する人をよく思い、あらゆる所で尊崇するのは自然の習い、また、値打のあるものを褒め讃えるのも気持ちのよいものですから、賞賛に過ぎるといことはありますまい。

パコリュス

余りの言いぐさ。

ユリディス

重ねてお聴き下さい。もはや、あなた様にあなたのものとなっていたもの、つまり私の手を明日与えることを、我が義務も強いはしないのです。あなた様の武勲が私の心の恋を吹き消し、優しい情けに濡れた我が胸が、あなた様だけを愛すると約束しない限り、私の手を我がものできるとは思わないで下さい。婚姻の日取りは私の承諾で決まったものではありません。私の申し上げていることの成り行きは承知しており、延ばすのも本意ではございません。でも、あなた様が私の心の秘密を奪われたのですから、王でも、父でも、どんな願い、命令でも、

死する覚悟で逆らうつもりです。今や隠すべき時ではありません。殿、これが私に語らせた代償でございます。

パコリュス

そのご好意に、姫宮、もう一つお情けを。その熱い恋が過ぎるのを期して待つ間、どうか、かの幸せな恋人の名をお教え下さい。これほど固い貞節を蹂躪したのは誰なのか、どのような美点が、不意を討ったのだろうか。

ユリディス

殿、あなた様にお教えするよう余りせかせて下さいますな。もし言ったとしたら、、、

パコリュス

おしまいまで

ユリディス

明日からは、その方に我が手を与える障碍は何もないことになるでしょう。

パコリュス

それでは、その方はこの地域にいられる。姫宮？

ユリディス

いらっしゃるかもしれません。殿、誰にも知れぬよう変装して、あるいは、私の側に召使として、あるいは宮中に上がっているかも、あるいは殿の家中で身をやつしているかも。あなた様が心を許している人たちの中、お会いになる

はずの客人の中、どこにいるかも知れません。何よりも、知りすぎるのも怪我の元、私も口が過ぎました。この話はおしまい。あそこに見えたパルミスに、投げやりな扱いをなされませんように。私があなた様を愛する時がくるまで、姫君の魅力が再びあなた様を虜にしますように。

第三場

パコリユス、パルミス

パコリユス

姫、苦情など述べて貰いたくない。他にも恐れねばならない人がたくさんいるのですから。あなたが、避難所になって下されなければ、私は彼等の脅威に圧倒されてしまう。あなたに従い、あなたのもとに戻ります。姫、この喜び、、、

パルミス

何故戻っては下されないのでですか、人に追いつかれなければ？他の人の命令で戻るのでは、あなたが愛してると言っても、私のためにも、兄上のためにもなりはしない。

パコリユス

あなたのために命令に従うことが、何物でもないのですか？

パルミス

ええ、ただ悔しさを晴らそうとしているだけですもの。

パコリユス

いつから、私のような愛が戻って来たことが、大した名誉ともならず、数えるに足りないものとなったのだろうか？

パルミス

操を守らない人を愛するのが恥となって以来ですわ、蔑ろにした人でも眼差しを向ければ戻ってくるようになって以来、浮気者が心を許しても、すぐに他へ心に向けるようになって以来。

パコリユス

その通りです。白状しますが、心細い戻り方ではあなたが信用なさらないという恥を受けるのももつともです。どうか、私に広い心をお示し下さい。私の心変わりのために、あなたの愛が激しい恨みに変じたとしても、大きな正当なお怒りを不幸な罪へのしかるべき憐れみの故に葬り去って頂きたい。私は十分に罰せられました。そのうえ侮辱、、、

パルミス

殿、罪が大きくても、私は善良な心を持っております。あなた様のような生まれの人は、支配者といえ、国家に何を捧げねばならないか知っております。国益は、個人の利益に優るのです。国益が語るときは、心情は沈黙します。

パコリユス

いいえ、姫、あなたの目を覚ましましょう。

私は、栄えある言い訳には値しないのです。ただ軽率にも、別の人を選んだに過ぎません。何ら国家的な理由が私を強いたのではないのです。これほど有利な条件で和平を結べるからといって、私自身が質になるように強いられたのではないのです。私は喜んで質となりました。私の罪が深いだけに、それを忘れて頂きたいとは、余りにもあなたに借りを作ることになりません。私の心、、、

パルミス

心変わりが遠ざけた恋人の間では、償えばすぐに罪など忘れてしまうもの。たとえ私を裏切りにおなりになったとしても、殿、それでも申し上げるのですが、あなた様を嫌うことはできないのです。

パコリュス

まったきお許しを給わり下さい。かくも純粋な愛、かくも優しい情けが私にお返し下さるものを思えば、、、

パルミス

では、お殿様、あなた様ご自身、いつの日か、あなたの愛を繋ぎ止める間違いのない方法をお与え下さい。もしそのような手だてがあれば、、、

パコリュス

あるならば、無論です。姫、私の心の想いのすべてをつなぐ手だてが、キューピッドが二人に与える甘い軛、私とその軛につながれるか否か

は、ひとえにあなた次第。かくも威儀ある帝国に私を服するには、私にわずかの奉仕を、一つの秘密を言って下さればよいのです。王女は、誰かを愛しておられる。それはもう疑いないことだ。姫宮と睦まじく語り合っている恋敵が分からない。あなたは、姫宮とともに昵懇な間柄、きっと打ち解けた話も伺っておられよう。私のためにこの疑いを晴らして頂きたい。そして、あなた以外の誰も私を支配しはしないという約束をお受け下さい。

パルミス

そんな当てにならない約束が、あ々、なんの保証となるのでしょうか？あなた様の約束が反故にならないとでも？あなた様が破った絆が、もう一度易々と破られなくなるとでも？もし私の注いだ情愛を思いだして頂けるならば、殿、私には約束ではなく、実行が必要なのです。ただ御手を与えることで私に言わせようと言われても、それは一向私を動かさししません。

パコリュス

御手を与えるだけで喋らせようだって！私がたくさん悩みを持ち、憎しみ、愛、名誉に引き裂かれているとき、懲らしめようという熱情に空しくも身を焦がしているとき、なんと言うことだ！あなたに御手を求めることができようか？

パルミス

私の方としましては、お殿様、御手のお約束がなくて、姫宮がお打ち明け下さったこと、心

の秘密を勝手にできましようか。私からその秘密を引き出すには、姫宮よりもあなたの方がもっと多くの義理を私に払わなくてはなりません。あなたが別人となり、そして、ただ結婚だけが私の縛られている沈黙を破ることができるのです。

パコリュス

あ々、あなたは、もう私を愛していない。

パルミス

愛しないことができればと願ってます。でも、意志が何の役に立つでしょう。深く愛しすぎてるのです。愛は、今までよりも一層優しく、一層強くなって生まれ変わって来るのです。でも、もし、

パコリュス

私を愛するのをやめるか、相手の名を告げるか。

パルミス

天よ、殿がたの憎しみあいから私をお護り下され。言ってしまうえば、殿がたを新たな戦争に引きずり込み、とこしえの憎悪に火をつけることでしょう。

パコリュス

構わない、どうして奴を恐れようか。それがしにシュレナがついてるかぎり。その恋仇が誰であれ、哀れむべきは奴さ。ローマ人の征服者にとって恐るべき王などいない。

パルミス

存じてます。でも、お殿様、一体なぜ相手を罰したり、復讐しようとするのでしょうか。御方のお心が美しい姫宮に魅せられて、姫君の尊敬と愛情をかち取ったとき、どの神が、どの精霊が、あなた様のお心が姫宮への愛に燃え出よう事をおの方に知らせべきだったのでしょうか。また、かの恋路の敵にしても、どんな徴からそれを知り、あなた様の生まれ出る恋に遥か遠くから敬意を払い、当時あなた様がもたれた恋とは別の恋が生まれるなどと予見し、殿ご自身以上に殿の運命を判じなければならなかったのでしょうか？我が想いに獲物が差し出され、心がたやすくあい和して、あなた様が望まれてもいなかったお宝を我が物にしたからといって、それが、盗みや殺戮を犯したことになるましようか。

パコリュス

よくわかりました、姫。あなたも、あなたの兄上も、理屈をこねて謎を隠そうとなさる。私は、話し、約束し、願ったが何も得られなかった。つまりは、あなたの利害は、私に優る。不届き千万、だが、

パルミス

お殿様、

パコリュス

失礼、姫君、それがしの心の動揺を姫に明かしすぎたようだ。いつかは、天も我につれな

くなくなるだろう。

パルミス

殿、あなた様がその気になれば、4人とも幸せになるでしょう。

第二幕終わり

第三幕

第一場

オロド、シヤス

シヤス

陛下のご命令によりシュレナに会い、無関心を装う理由を前もって探ろうといたしました。殿、余りにもよそよそしく、口も聞かずに、、、彼が来たとき、それは陛下が判断されること、、、ただ、慎み深い様子は、困惑や心配を抱いているかのごとくでございます。平静さも十分な熟慮の上、彼の大人しさの故ではございません。無関心には不安が隠され、よそよそしさも些か作りものじみておりますようで。

オロド

借りを返せないほどシュレナに借りを作つた王に取っては、シヤス、その沈着冷静も案ずる種となるのだ！報い様のないほど仕えられるのも、恩義の重さに難渋するものだ。自らの光輝を秘かに不似合いなものと同様に、彼の心中は忘恩で報われるのではないかという恐れで満ちている。忠義に過ぎるのは面倒、役立ちす

ぎるのは鬱陶しい。シュレナ一人がわしを亡命の地から呼び戻してくれた。彼一人が、それがしから篡奪したものを、王笏を取り返してくれた。わしのためクラッスを追い払った。彼のために同じことをしようとすれば、どんな贈物をすればよいのだ？王位を分けようか？もし王位の支柱のみに甘んじなかつたら、王位はすべて彼のものとなろう。たとえわしが王位の喪失を嘆き悲しんでも、彼は城壁を撃ち破ってくるだろう。たとえ神々に願っても、彼は戦いに勝利するだろう。それを思えば、震え、赤くなり、腹が立つ。そして、いつの日か、彼が自分の手で代償を取り立てるのではないかと恐れているのだ。彼の名声と富も、その富は重荷であり名声は我慢できない。臣下の中に、より重きをなす者に会わぬ限り、我が栄光を凌ぐものがない限り、要するに、自分が一番王冠にふさわしい限り、君主は安堵するものだ。

シヤス

殿、かような窮境を抜けるために、政治の英知は、二つのあい異なる方途を教えてください。シュレナが何をしようとせよ、シュレナが何を期待してにせよ、彼を滅ぼすか、あるいは、彼を婿とするかいずれかです。富み盛んで、職務により堪能なシュレナが婚姻によって他の国王の支柱となったならば、陛下が巻き込まれた紛争に於て、彼が妻のために父王の味方になったなら、殿、そのとき文句を言ったとて何になりましょうか。彼を滅ぼすか、さもなくば、しっかりと味方にするか。中間はないのです、、、

オロド

わしの考えも同じだ。だが、一方を拒まれたからといって、他方を採れようか？彼の殊勲、がわしを王としたお礼に、彼を殺す、、、この言葉だけでも、わしは恐怖に青ざめる。かような話はするな。国が滅びないうちは、それ程までにわしの徳が薄くならないうちは、こうした卑劣な殺人を正義と名づける政治の理屈にわしが降参しないうちは。

シヤス

しかし、殿、彼の荣誉にそれほど不安を感じておられるのに、なぜローマ軍にシュレナを向かわせたのでしょうか。何故アルタバズ王に殿の軍を使い、彼に大きな軍功をたてさせる戦を与えられたのは？

オロド

シヤス、思惑通りに運ばなかったのだ。ローマ人の力はめざましいと思った。わしがいなくては、ローマ人を敗れないと見越して、その上で、かの王に襲いかかったのだ。アルタバズ王は、同時に戦争の惨劇を防ぎ、婿の提供を拒めまい。戦争の惨禍を目にしては、国民も王に和平の締結を薦めるに違いない。一方、ローマ人に相対したシュレナは、一進一退であるか、あるいは敗北を被ってしまい、勝利の荣誉はわしのものとなるか、さもなくても、倒れたシュレナを再び立ち直すことになるだろうと考えた。一方は成功し、同盟を結んだ。だが、シュレナは勝利してわしの見込みははずれた。アルタバズ王と和平を結んだとたん、クラッススは死に、

ローマ人は敗北したとの知らせを受けた。見事なすばやい勝利の実利はわしがり、誉れはシュレナがとった。思いもよらぬ好運を拾いながら、わしは思いももうけぬ幸運を得ながら、余りにも高みに上る不幸を背負った。わしはアジアとヨーロッパを睥睨してる。とはいえ、わしの武功によるものは何もないのだ。近国の者らが恐れ震えているとき、わしは他人の剛腕によって畏怖させてるだけなのだ。ついには、わし自身さえ恐れる有様だ。もしたくさんの王たちが求愛するマンダヌが、家臣の払い下げ者や選び者とされては、卑劣な情け容赦のない政道が、ただ一つの解決策なのだ。

シヤス

払い下げ者！陛下、彼が拒否するとでもお思いで。

オロド

彼が他の情事にふけってることがあり得ないか。しかるべき誇りを盾に、わしの命令よりも自分の心情を尊重するのがありえないのか？彼が来た。二人にしてくれ。

第二場

オロド、シュレナ

オロド

シュレナ、そなたの精勤は（こんなことがあろうとは！）わしには苦悶の種だ。わしはそれを思うと恥ずかしい。それに匹敵する御礼のし

ようもなく、安堵できないのだ。そなたの武勲が、感謝しようにもできなくさせるのだが、褒美の足らぬ所をどうか補いをつけておくれ。そなたが尊ぶ報償があれば、いささかでも恩知らずにならないですむための手だてとなるのだが。

シュレナ

私が陛下にお仕えた時、我が褒美も頂きました。殿、臣下がなすべきことを果たしただけでございます。誉れが私のものです。それは私が求めましたただ一つの褒美です。とは言え、殿、心寛き国王から、ふさわしき褒美の一つもお願いすることが許されますならば、最も高潔な徳行の士も、迷うものでございます。もし、私にかような事がございましたなら、どうかお見逃し下さいますように。私が恐れるような最も正当な怒りでも即座に消してしまわれるご好意を私にお示しください。そして、もし、、、

オロド

予想もつかぬ、起こりそうもない不幸を赦免することにわしの感謝は限られると言うのか。わが心からの有難みをそなたに示すために、罪を待つのか？天はわしにもっと幸あるものだ。そなたを嬉しくも我が血筋に入れることで、お返しをする手段を見つけられたのだ。わしのために仕えてくれた、褒美だ。

シュレナ

私は長い間途方もない望みを抱いておりました。でも、とにかく王子が、、、

オロド

そなたの妹君を愛していた。政道のために、宮の心は離れた。この代償でアルメニアとの和睦ができたのでな。だが、償いはたやすくつけられる。妹君に似合う王は幾らもいる。そなたの為には、もうじき着くはずのマンダヌが、明日にも手を与えようぞ。それこそ数々の武勲によってそなたが王冠で飾った運命の女神が、それがしの掌中に委ねたことじゃ。

シュレナ

このような過分の名誉に匹敵するものは何もありますまい。そのことについて、失礼を省みずに申し上げますならば、王女にはしかるべき王位を賜るのが父上の御愛情と言うもの、姫宮と私は身分が違う為、姫の血筋を貶めてしまい、私のを挙げるわけでもない。また、かような縁組はどれほど持ち上げようと、私は相変わらず家臣、その上姫を家臣に落とすかも知りませぬ。私の武勲がどれほどであろうと、この結婚から生まれでるのは、王ではなく家来。いったいどんな眼で、殿、王冠を得られなかったお手を私に下さるのを見られようとされるのでしょうか。あまたの王の申し込みを受けられた女人が、陛下のご命令とは言え、このような卑しい配偶に同意されるのでしょうか？私にはこの上ない侮り！姫宮にはこの上ない恥辱！なりません、殿、忠実にお仕えする者の言うことをお聴き下さい。陛下の血筋と我が血を結びつけようとされますならば、王子と妹を結びつけねばなりません。殿、御先祖様の血に他の血を

加えてはなりません。王の家臣が主君の血を受け取るにしても、パルティアはあまりに長く栄光の中にありましたために、彼等が負かしたものの血を王達から受けるのをよしとしないのです。もし御存知ないとしても、陣営中不満だらけです。民衆は恨めしく耐えているに過ぎません。アルタバズを勝利者とするどんな理由があり得ましたか。意気地のない者にさえもっと厳格にするものだとおっしゃいます。私は彼らを黙らせておきます。しかし、殿、よく考えてみますと、彼を攻撃するより、婿をやる方がよいのです。もし民衆の意向に耳を貸すようなことがあったなら、和平よりも戦争を選ばれたことでしょう。

オロド

私の許しをあらかじめ求めるとするのは、彼らの先頭に立つつもりだからなのか。パルミスに王妃と言う高位につけたいために、奴らの思い上がった願いをそなたに言わせているのか？主人を立て直し、ローマをやっつけた武勇の士に不可能はない。だが、天下に変わらぬものはない。最高の勇士と言えども常に好運とは限らない。わしは約束をした。それは聖なものだ。王子もユリデイスを、愛らしい限り愛している。率直に言えば、フラダト⁽⁶⁾がパコリュスに反したとき、アルタバズには力になってもらいたいと思ってるのだ。かつてミトラダト⁽⁷⁾がわしに反抗してきたように、パコリュスはフラダトを警戒せねばならない。あのはやる、権力に執した奴、たとえ兄が、

シュレナ

王子は、私が義務を果たす事を御存知です。また、反逆者を罰し、篡奪者を追い払うことを忘れてはおりません、、

オロド

そうした行為は見上げたものだ。だが、それをしを支配者に戻したことが、わしの娘を見下げる理由になるのか？

シュレナ

見下げるですって。陛下、ただ私の忠義心から姫宮にふさわしくない者とばかり思っておりますものを！どうか私から陛下への義務をお取り上げください。姫宮に値する者となるために、王となるべく駆け回りましょう。主人の地位を回復し、ローマ人を破る勇士に不可能はないとするならば、マンダヌ姫のために易々と王笏を献上するに、障りとなるような王がいるのでしょうか。殿、何を征服すればよいか、ご自身で命じてください。婚姻の時、それで姫宮の頭を飾りましょう。それから、我が命を滅したり、あるいは、姫宮を支配者とするのが、見下すことであるかどうかご判断ください。ともかく、私は生まれながらに臣下であり、主人に仕えるためだけに命を賭けようとする家臣であります。私ごとき者が、姫宮との婚姻で王家の清らかな血を汚すことはありますまい。

オロド

その恭順の底に何があるか詮じはしまい。もう一度、腹藏なく話し合おう。そなたはわしの

家来だ。だが、すこぶる強力な家来で、腕力にものを言わせても、不都合ではないほどののだ。そなたはわしの下にあって、二つの州全体、実に勇敢な民衆と誇り高い民族を所有している。そなたがわしに忠実な限り、そうした連中に対してわしの権威は及ぶに過ぎないのだ。奴らは、これまで忠実にそなたに従ってきた。そなたの意思次第で、そなたが謀反を起こそうとすれば従うだろう。そなたの名声は高く、近隣のすべての王が、そなたをオロドのごとく見立て、そなたと運命を共にしよう。勝利の女神は常に汝の下にあり、ローマさえも、城壁の中において不安を覚えるほどだ。栄光の故に、あるいは、もしもの時わしの怒りに備えるためか、汝はどこへ行くにも1万騎を従えている。臣下の扈從としては、おろそかならぬ数だ。そなたにわしの思いを一切言ってしまうと、義務に結婚の絆が絡まない限りは、そなたがわしの配下にいるとは信じ切れないのだ。

シュレナ

どんな罪のため、殿、どの様な無思慮の故に、これほど信頼を得られないのでしょうか？もし私の心、腕が買収できるものでしたら、ミトラダトもクラッススも、何も惜しみはしなかったでしょう。二人とも、

オロド

クラッススとミトラダトはおいて、シュレナ、そなたの榮譽の上がるのは嬉しいのだ。そなたに借りてるものを、世の中に示すのもいやではない、だが、わしが記憶していても、汝は忘れ

ねばならない。そなたの殊勲によって、わしの国が戻ったことも、わざわざそなたに言ってもらうこともなく承知している。そなたの忠義が衆に抜き出ているからといって、それがしが恩を感じていないのではない。煩わしくなるほどになってはならないということだ。

シュレナ

パルミスに戻りましょう、陛下。義務の鎖が私の臣従を保証するには弱すぎるというなら、妹を王妃とし、子孫を王に持つくらい、確実に強い拘束がありますか？私の血を王位にお加えください。他のものを探す必要はございません。王の利害と私の利害がこれほど一致した限り、世界のどこにも、未来永劫それを離す手だてはありますまい。

オロド

でも、シュレナ、すでに協定を結んだ後に、盛んな婚宴の準備の盛りに、そんなことが出来ようか？和平によって奪い取った友を、挑発的なローマ人にやってしまうのか？王子は願った幸福を断念するとしても、王女はどう思い、父上殿は何をなさるだろうか？

シュレナ

父上殿については、陛下、そのお取り扱いを私にお任せください。私が請け合います、また、姫宮についても同じく請け合えると存じます。陛下の結ばれた和平にもかかわらず、王子自身に向かって姫宮はご自分のお心を明かされました。一体、明日のご婚儀をどのような

思いで待ち受けておられるか、申し上げることが許されますならば、姫宮には別に愛する方がおられるのです。

オロド

えっ、誰を？

シュレナ

それは、おっしゃいません。おまけに、姫宮の愛はもう隠し事ではありません。そして、協定の実行を延期するよう求めておられます。そのことが、いきり立つ民衆に大いに不満を与えているのです。

オロド

彼らに王を与えるためにどの血筋を選ぶべきかわしに命じるのは、民衆なのか、それとも、シュレナ、そなたなのか。國中我が命令を行き渡らせるために、わしは臣下の意見を聞かねばならないのか？王子がパルミスに再び愛を返そうというのなら、今度は王子が姫宮を袖にしてもかまわない。それ故に、紛糾が生じた際には、どんな対策があるか後で考えようではないか。ところで、汝だが、我が娘には相応しくない、畏くも王族となることは慎むというのだが、汝に似合いの伴侶を選ぶがよい。どの様な点に関しても、わしを羨ませることのない伴侶をだ。それがしはこれが心配の種で胸が痛むのだ。明日には、きれいさっぱり胸の曇りを取り除いてもらおうぞ。

シュレナ

陛下、私は誰も愛しません。

オロド

愛していようがいまいが、そなた自身が選ぶのだ。さもなければ、わしから受けとれ。

シュレナ

しかし、もし私が恥じ入るような高貴な女人を愛しておりましたなら、わが心の秘密を陛下に申し上げられましようか。

オロド

では明日、シュレナ、出来れば今日にも、愛のあるなしにかかわらず、婚姻を取り決めようではないか。まずもって、ユリディス姫に会いに行き、その気まぐれを義務という掟に従わせるのだ。姫君の美貌に、姫の気に召さない王の阿諛追従を使うのは勘弁させてくれ。パルミスに来るように言っているのか確かめてみたいものだ。

第三場

オロド、パルミス

オロド

シュレナには驚かされた。あれほどの剛の者が、あれほどの才智をも持っていようとはな。思いもかけなかつただけに、一層その才智は輝くのだ。。わしの娘を拒むための理屈を並べた。実に強力で、運び具合が見事だったので、彼

が姫宮にふさわしくないと言ったときには、わしももっともと思ったほどだ。シュレナは誰を愛してるのかそなたは知っているのか？何か想う者がいなくて、魅力あふれる女人がいなくて、あんな断りをしたなど道理が通らない。愛すべき女性が彼の偉大な心を、王族の血筋に入ること断たせるのだ。

パルミス

兄上は誰も愛していないと思ってましたが、

オロド

シュレナもそう言った。だが、王女は明かしたのだ、明白に愛していると。そなたは友達ではないか。誰が姫宮のままならぬ心を強く捕らえているか知っていよう。

パルミス

かりに王女が私に何か打ち明けられたとしても、陛下、それを洩らすのが許されましようか。誓約なく秘密を受けたにしても、、、

オロド

王のためには、誓約も反故になると思っていましたが、もっとも、それが厳格なのは望むところだ。わしの利益のためにも、沈黙させるがいい。だが、少なくとも、そなたは、わしについては安心してよい。

パルミス

私の心のうちでしたらすべてを打ち明けますのに。愛してた人をなお愛しています。気持ち

は変わっておりません。何も秘密などないので。

オロド

愛してるだと、姫！恥を知りなさい。もっと低い声で話しなさい。そなたを愛してもいない者を愛するのは、弱さだ。

パルミス

いいえ、陛下、王子に愛情を捧げるのは、魂の偉大であって弱さではありません。王子の心になつた心を保ち続けるのは、誇ってはならないような何ら恥ずべき事はありません。私はそれをいつも光栄に思ってますし、かつて優しい眼差しを向けられた幸福な思い出にとろける私の心は、決して、宮が火をつけた情熱の輝きを消したり、宮の語られた愛を無にしはしないのです。

オロド

それ以上の事をしなさい。復讐するのだよ。姫、恩知らずよりもはるかに、美しい恋心にふさわしい王がたくさんいる。

パルミス

それは、未だ愛する人から私を遠ざけることです。支配するという口実で私を追い払うのです。いつまでも宮を、つれない情け知らずを目にしたい。なにも目にするやるせない喜びのためではありません。そんな偽りの快樂は私にはふさわしくない。王のつれあいとなるのを拒むにも値しません。でも、捨てられた者には、

命を失うほど悩みながらも味わう快感があるのです。不実な男が、見も知らぬ、でも熱愛されてる恋敵に怯え、胸中は不安に満ち、私と目を交わすと罪の報いに出会い、婚姻の手によって私のなぶられ者となり、癒せない悩みの中に後悔しつつ、額を赤くし私にまみえるのです。私の青ざめた顔に愛が印した思いやりの消すに消されぬ影は、宮の心を責め立て、二人のかたらいで流される私の涙と溜息は、宮のそれを呼び起こしましょう。でも、それは、宮が幸福になろうとすればなれたこと、もはやそうはなれないこと、浮気心を恨んでも遅すぎることを思い知らせるに過ぎません。まとめて言いますならば、私を失ったのを痛恨の思いで噛みしめるのです。それが私の愛の願う幸福、情け知らずの人への企み、宮を目にすると、期待する喜びなのです。陛下がお知りになりたかった気持ちはこうなのです。

オロド

そなたの気に入る、王たちを不安がらせるために、キューピッドと一緒に王と共に王位に登るかのよう、王という地位にそうした場違いな制約をつけるとは、王を並の人間扱いする事じゃ。我々王族にとって結婚せねばならぬのは、王子をたくさん儲けて、王笏の支柱、国々の将来の堅めとするため。我らの力はそこにある。我らの大なる運命においては、復讐が出来なくては、謀反者を勇気づけるのみ。それに加えて、我らの縁組においては、国家の利害から、美貌には眼を閉ざし、愛情には心を閉ざす。我ら動かすのはただ政略のみ、政略が肝腎かなめ。

愛情が混じることであろう。あれば喝采し、なければ諦める。王の言葉を文字通り信じてよいのは、こういうことなのだ。我々は嫉妬したりはしない。心が得られるかどうかなど気に留めはしない。卑しい心が楽しむような無益な空想に耽けるのはお止めなさい。姫君、王子が苦しむにせよしないにせよ、それがしの選ぶ王と結婚なさい。

パルミス

わたしがあわてふためいて、愛してもらえない王を拒んだからといって、陛下、お許してください。王子に愛されたと思ってますし、また、その愛の甘美さは思い出だけで夫以上に喜ばしいものです。

オロド

その話は止めよう。姫、わしにそなたがいとおいしいようにそなたに大切な兄上に言うておくれ、彼の丁寧な恭しさの中に、歴然と現れているのは、、、

パルミス

何でございますか、陛下。

オロド

シュレナには、わしの考えを言い聞かせたはずじゃ。よく考えるようにとな、姫、さらば。

パルミス

なんと不吉な前徴！この意味不明の脅しは何を指しているのか！二人の恋人を救ってく

ださい、天よ、二人の恋が生み出した嫌疑を晴らしてください。

第三幕終わり

第四幕

第一場

オルメーヌ、ユリディス

オルメーヌ

そう、お二人の仲は半ば露見したも同然、シュレナ様の命が危のうございます。これはシヤス殿から知りましたが、打ち明けて言いますならば、シヤス殿はシュレナ様逮捕の命令を受けてるのではないかと案じております。

ユリディス

そこまでは敢えてしまい、オルメーヌ、まさか、

オルメーヌ

姫君、余りにも気丈に過ぎるお方ですこと。英雄も逮捕されれば、自分の二本の腕しか持たないのです。ありあまる栄光も頼みのならない支えとなることはしばしば。

ユリディス

功績は羨望にさらされるもの、シュレナの悩みは、もっとも輝かしい人生を送った人にはつきものなのです。でも、どんな理由があつて、

そんな予想をするの。

オルメーヌ

シュレナ様は姫君を愛しておられます、そして、愛されてもおられます。

ユリディス

誰が言ったのか、、、

オルメーヌ

姫君とシュレナ様です。殿とあなた様の犯された咎なのです。シュレナ殿はマンダヌ姫を拒み、他の誰をも望んでいません。姫君が愛していることは知れ渡っておりますが相手は不明です。姫君、以上のことで一切が明かになりました。

ユリディス

そなたはわたしに、根拠のない推測をしている。

第二場

ユリディス、パルミス、オルメーヌ

パルミス

姫宮、全ての門に警護が配されました。誰も、王の許可がなければ入ることも、出ることも出来ません。

ユリディス

構わない、それで何を恐れておいでなの。

パルミス

何か大きな嵐が私たちに降りかかって来ようとしているのか、或は、姫宮、大物の首を狙ってるのですわ。兄上を思うと震えます。

ユリディス

何の故に震えてるのです？シュレナに全てを負ってる王が、彼を滅ぼすもんですか？

パルミス

縁組がきっぱりと拒絶されても、王は平然としているとでもお考えで、

ユリディス

あれほどの忠義を尽くしたのですもの、罰の前に褒美を与えるべきと思われるはず。

パルミス

そのはずですが、でも、こうした侮辱を受けては、感謝の念など浮かびますまい、かように蔑ろにされては、忠義の程も薄れ、過ぎたことに目をやりもしません。

ユリディス

英雄の妹にしては、ずいぶん臆病なこと。

パルミス

愛されてるからといって、大胆不敵になれるのでしょうか？

ユリディス

英雄の愛人は英雄に倣おうとするものです、英雄と同様、怯えずに危険に直面します。

パルミス

意気軒昂ですね、王女様、英雄の愛人といえども優しい気持ちを持ってますから、危険を思っては愕然とし、その様を想像しては傷つくのです。愛人の滅亡に大きな利害を持っておりませぬ故に、悠然と逮捕を迎えることなど出来るはずがありません。英雄のような泰然自若とした男らしい勇氣は、女が誇る徳でもありません。仮にそこまで堅固な心をお持ちだとしたら、愛と言いながら、実は冷淡に過ぎませぬ。もし兄上を愛していらっしやるなら、あわてふためく様を拝見したことでしょう、せめては、姫宮から一つの嘆き、一粒の涙がこぼれ落ち、妹の方が姫宮より一層放恣に感情を表わせることを羨むお気持ちを示されたでしょう。神々よ！わたしが手本を示したのに、それにあらがう方がいらっしやるのです！私は目前に表したのに、御目はそれをお受け取り遊ばされないのです！いつの日か、血は愛より濃いを知るなんて思った人がいまいしょうか？いいえ、わたしの間違いです。愛人を失っても、姫宮には大して苦くはないのです。愛人は、兄弟よりもたやすく見つけれられます。天より与えられた兄弟を失い、たとえ再び兄弟を得られたとしても、それはシュレナその人であり得ましようか？

ユリディス

もし危険に瀕してる愛人を失ったとしたら、かわりに得られる人がシュレナだとも言う

のですか？これほどひどい打撃を受けて、心中に嘆きをこらえ、あなたほど震えおののいていないとでも思っているの？わたしが不敵なのも、身分相応の体面を必死に汚すまいと想っていること。どれほど堅固不動に見えようと、胸の中ではそう想ってはおりません。それは柔弱で、ただ不承不承心中密かになみする正当で苛酷な誇りに従っているのです。確かに、かの愛する英雄について心を解いて話せば、彼の死が既に見えてると思ってます。死ぬような切ない苦しみは、もはや彼とともに死ぬのを熱望するしかありません。

パルミス

もっと冷静になれば、もっとうまくやれるはず。兄上を助けるために私の愛人をお受取りください。姫宮、結局は王子と結婚せねばならないのですから、政治上の必要からそうなさるよう努めなさい。

ユリディス

私の愛はそうした政治には馴染みません。私の愛はすっかり現われましたし、残る隈なく語られました。また、王子は私の心中をよく御存知で、私の手を受けられても疵一つない幸福としてお受けにはならないでしょう。私は他の人を愛してます。今更打ち消せないほど、かの人を思っこの愛が消え失せる前に、はっきりと言いました。これは言葉が過ぎました。でも、一切を失うのであれば、私は約束を守り、最後まで行きましょう。

パルミス

では、彼が滅んでもよいのですね？

ユリディス

そんな不正なことまでやれましょうか！

パルミス

姫宮、あなたのつれない仕打ちにも、あなたのお心が執する結びつきにも、王子は寛大に請け合われるでしょう。王子を幸せにしてください。そうすれば、王子はもうシュレナの犠牲にはなりません。シュレナはマンガヌ姫におあげください、そうすれば、罪は晴れます。

ユリディス

シュレナをマンガヌにあげればよい、姫、その話はよしてください。もし、彼の心がまだ私の意に従うならば、私の憎しみが消えて我が想いが王子の愛に変わるまで、マンガヌを愛するのは待つように。あなた自身が、兄上を私に背くように決心させなさい。出来ることなら、私が彼を憎むよう無理強いなさい。理屈を重ねて、私を彼にそむかせなさい。涙に訴えて、彼を不実ものとなさい。憐れみや愛情を用いて、私の愛が衰えるように全力を注ぎなさい。残りは私がやり遂げましょう。どれ程愛が盛んでも、一端滅じた恋は独りでに消えます。

パルミス

王子がいらっしゃいます、姫宮、愛の語り合いに迷惑な証人など不用です。私がない方が、彼の心をくすぐり、彼の敬意を我々に有利に向

けやすいでしょう。先行きが心配でなりません。彼があなたに献げようとしている想いを受け入れなくては。

第三場

パコリュス、ユリディス、オルメーヌ

ユリディス

殿、門に歩哨を立てたのは私のためですか？逃亡を確実にするために、護衛がつけられたのかしら？もしや、盛大な婚儀のための用意にと、、、

パコリュス

姫宮、誰にでもあなたと同等、秘密はあるものです。あなたが心中を明かされ給われた方々は、あなたのお指図に従い勇敢にも沈黙を守っています。王もあなたの真似をされたのです。ご不都合なことがお有りならば、我々同様にご明察いただけるはずです。

ユリディス

推察はしばしば誤るものです。

パコリュス

私の推理は間違ってるかも知れませんが、誰を責めるべきかは弁えております。あなたが愛されてることは明々白々でしかないのでから、その相手を知らなくても、秘密を打ち明けられた人は知っています。彼の罪はたいへん重い。愛人は沈黙することが許されます。しかし、

家来が王に向かって黙するのは罪です。国家の安泰に障害となるものを知る者が、それを隠すのは大罪を犯すことです。ですから、あの打ち明けられた人は、、、お分かりですね、姫宮、眼を見れば、心の中をよぎることが分かります。

ユリディス

彼が私の秘密を知ってることは、私の友情を得てもいるからです。ですから、殿、彼に少なくともいくらかの心の動きを覚えるのです。

パコリュス

当然なことです。あなたのようなお心ならば、憐憫をかけるのは誉れであるとも思っておられましょう。しかしながら、姫宮、その困惑、その動揺の様子には、同情以上のものがないのでしょうか？彼の危険の影にも心を配り、憐れみが即座に彼の為の不安と変じるのも、その親しい話相手は、愛人として、あるいは彼自身がそのような感情を起こさせているのかと、疑わせるものではありませんか？

ユリディス

かまいません。なぜ、その二人を混同するのです。私が震えるのは、つまりはただあなたのためであるときに？

パコリュス

なんと！今度はあなたが私を脅迫なさるのですね？あなたは、盲目の愛に我を忘れて、、、

ユリディス

取り乱してはいますが、殿が思ってるほどは盲目ではありません。率直にものを申し上げます。殿、あなたは夫として資格ある方とっております。私の手は、あなた以外の誰のものにもならないことでしょう。私の願いはそこにあり、心の想いもそうなりたいと欲しています。そうなり次第、あなたは私の愛を得るでしょう。決心がつくまでもう少し時間をくだされば、かの愛しい人も、希望の根を絶たれましょう。私が誰を愛しようと、あなたが御自身で私をあなたから離させない限り、私は、あなたのものでしかありません。もし、あなたを愛するようになるまで時間が必要としても、尊敬を重ねることによってしか出来はしないでしょう。もし、あなたが無理に尊敬を失わせるようなことをされたなら、もし、事を急いで罪にまで至っては、、、私の言うことがお分かりですね、殿、そして、あなたにとくと申し上げたつもりです。なぜ、あなたのためにこうした願いを払っているのか。私はあなたの榮譽に関わりを持ってます。ですから、あなたが拭い得ない染みでそれを汚したりはなさらぬかと、品下った評判がいけずな口から広がり、あなたの御名声が世界中で失われはしないかと、また、おぞましく残酷な忘恩の行為によって、不安を晴らしはなされないかと、案じて いるのです。そんな後で、まるで殿が私にふさわしい方であるかのように、あなたにした約束を果たせるでしょうか。殿に王冠を取り戻した方の血に煙る王冠を慄きなく頂けましょうか。ローマ人を撃退する軍を失ったとき、私はローマ人の血腥い怒号の餌食に身をさらせられましょうか？クラッス

スが敗れたとは言え、ローマは倒されたものではありません。他の者が、敗残の者達を糾合しました。新しい騎兵隊を組んで、氣勢をあげようとしている。あなた方には、ローマ人の制服者がまだ必要なのです。こうしたことを、運命の女神はあなたのために恐れてるのです。まもなくあなたと運命を共にすることになるはずなのに、人がその思い出を愛するような国王以外の者と一緒になろうとして、恥知らずの者となってしまうことでしょう。

パコリュス

あなたの心配されてることは、すべてあなたの掌中にあるのです。姫宮、いささかお譲り頂ければ結構です。明日、父君が約束されたことをなす、そうなれば、愛人も、愛の語らいの相手もはや敵ではありません。純粋な恋が知る優しい敬愛を持って、再び、心をこめてあなたに懇願するのです。繁き恭順も、いつも軽く見られ、あなたの私に負う義務も手に入れない。構むことのないお心の堅さ、悩める苦難、、、

ユリディス

私、私は鈍感だとしても？私の心の戦いには生ぬるい戦闘しかないとしても？殿、私は愛されており、あなたはそうではない。私は義務に従って、確実な療法を差し出してるではありませんか。私に取りついてる病気に悩まなくなるまで、あなたの病を終わらせるため、ほんの一刻の猶予を求めてるだけ、私の病はいつまでも続くものなのに。

パコリュス

一刻と言うのは、しばしば、曖昧模糊たるものです。姫宮、もし王が待つのにうんじたら、その権威が軽んじられたのに復讐しようとしたら、君主が腹だちになったら何をするかお考えください。

ユリディス

私の命は、王の掌中にある。その偉大な勇気をおふりになって、我が命の上に、栄えある作品をお示しになるでしょう。

パコリュス

どうか、もっとご好意を、あなたが心配すべきなのは、愛する人の安全だけです。王は、あなたの弱味を御存知ですし、愛人の危険が、どんなに強い心にも与える動揺も知ってます。

ユリディス

確かに、それが私の弱味です。でも、愛と共に勇気をも持っています。必要な折りには、それを白日のもとにさらすこともできましょう。偉大な王なら、私に喜んで命令を受け入れさせるような穏やかな道を取るでしょう！どうか、よくお考えください。一歩でも道を外れたなら、私たちは遠くに離れてしまいます。初めの一歩を踏み出したなら、それだけが私たちを縛っているのですが、残りの鎖は簡単に愛によって破られましょう。今や解かれた義務の支配者となったキューピッドは、破り捨てた軛にいつまでも喝采するでしょう。

パコリュス

姫宮、、、

ユリディス

では、殿、引き下がらせて頂きます。私に言うことがあれば、不遜にも自負心が目立ってはいけませんので、我が打ち明け役と後はお続け下さい。

第四場

パコリュス、シュレナ

パコリュス

シュレナ、私は苦情を言いたい、それだけの理由がある。

シュレナ

私について、殿？

パコリュス

そなただ、もう隠しだてする時ではない。そなたの草々の言い逃れにも関わらず、真実は知れている。わしは、そなたにもっと腹を割って話して貰いたかった。そなたには全幅の信頼を寄せていたし、他の者から知るのには耐え難かった。どれほど用心しようと、恋は口数の多いもの。沈黙すればするほど、恋は秘密を漏らし、隠そうとする気遣いが、かえって隠してるものを露見する。人に知れるのがどんなに心配か、黙るほどに明かとなる。もうそなたの恋を隠すには及ばない、誰もが知ってしまった。そなた

の手管が、そなたの意に反して語ってしまった。

シュレナ

殿御自身が嘆かれていますのですから、その嘆きは正当です。殿、つまりは、私には自分の罪が知れないのです。

パコリュス

実に恭敬の限りを尽くして、マンダヌとの結婚を断わったな、あまりもの理路整然たる弁舌は、かえって疑いを招かずにおかないものだ。姫との結婚を提案される前から、そなたの理屈は用意されていたのだ。まあ、あれほど礼儀を尽くした断わり方を見た者はあるまい。だが、どんなに礼節の限りを尽くしても、姫の恥辱は減じないのだ。むしろ全てを受け入れて、姫の行動を見守るべきであった。姫の強い自尊心が、父親の意図に従わないことに希望を賭けるか、余りに冷たい、不器用な口舌で姫を苛立たせ断りの栄誉を姫に譲るべきだった。そなたとしては、ユリディスの代わりにパルミスを持ってきてわしにあてがいがい、わしを騙してわしの怒りがかい、自分の為には何をとっているかを示すような術策を弄したかったのだ。しかし、そなたがすべき事は、王女の心を義務に従わせるように全力を傾注することだったのだ。そのような命令を受けたのだから。ところが、今、わしは姫宮に嫌われているのではないか。これが、忠臣にとって立派に命令を果たしたということなのだ。

シュレナ

私はよく分かっております。殿、誰かが私を愛してる、誰かが殿を愛してる、誰かは殿を愛していない、そして、私は誰も愛していないことを。何もかもが私の罪に帰せられます。私一人で、王に義務を負い、パルミスとユリディス姫、自分自身について責任を負わねばならないのでしょうか。まるで、私が全軍に力を揮うように、易々と情熱に燃える愛に力を揮い、ローマ人を敗り、王位を与えるのと同じくらい軽々と心を変えることが出来るようではありませんか。愛の国は、殿の支配される帝国の及ぶものではありません。愛には愛の権威があって、国王や政治の支配を認めないと敢えて申し上げたならば、さらに罪を重ねることになりましょうか？愛はあらゆる力の行使を忌み嫌い、力づくには直ちに反逆するものです。私が愛を抑えきれなかったのが罪だとされますが、殿御自身すら、それを滅ぼせなかったではありませんか！殿の御命令によって、かくも儘ならぬ恋心を変えてみてください、ユリディスが殿を愛し、パルミスは殿を嫌うように。さもなくば、殿の心を殿御自身の命令に従わせて、ユリディスを袖にし、パルミスに戻るようなさって下さい。殿御自身、殿及び姫君達に為され得ることは、その限りで私の行為を罪とするでしょう。しかし、殿が、殿御自身、姫君達に何もできないのなら、私の愛の罪を責めたてないで下さい。

パコリュス

愛が犯す罪は許そう。だが、しつこく黙り込んで、念入りに隠れこんで長く犯され、王に対して不穏な秘密をたくらむ罪は決して許すま

いぞ。主人の恋敵となる臣下は、どれほど表に現われぬよう取り繕っても、恋することは反逆なのだ。愛の罪を、政治上の罪としているのだ。情状酌量の余地はある。ことに、彼が愛される限りは。しかし、王冠に反逆し、全体の利益に差し障るようになっては別だ。

シュレナ

確かに、しかし主人の恋敵になったとしても、彼の恋の方が先であったのです、そして、恋にもめげず、彼は愛されているながらも、彼の魂のあくがれる御方を譲り、望みを放棄し、愛を否認しようとしてしました。これは、赦免やご同情に値しないのでしょうか？

パコリュス

愛してる者を譲るとは誉めるべきことだ。だが、愛を否認しようとすることは、譲ったことにはならない。そのような偽りの阿諛がもたらすのはいつまでも続く根深い怨恨だけだ。

シュレナ

先ほど、殿は情状酌量についてお話しなさったが、もう脅迫されようとされる！赦しを受けるのは、雄々しい武士にとって恥辱、脅迫は一向に彼らを動じさせません。私のお供は城外に散っており、城内ではシヤスが警護を固めております、私の逮捕が何時かと待たれてるので、命令さえ受ければただちに実行されましょう。私の剣なりと首なりと欲しければ、殿、御命令を。好きな方をお取り下さい。私の血の一滴すら、わが王のものでないものはありませ

ん。ですから、私を滅ぼすことは、私の滅亡にはとどまらないでしょう。私は生きねばならない限り、わが栄光のために生き、立派な手本を後生に残しました。でも、もし殿が私を狂おしい嫉妬心の犠牲に処したなら、私の生涯は、殿にとって大いに役立つものとはならないでしょう。

パコリュス

シュレナ、わしの身分の者はそのような作法は好まぬ。あまり自らを貴しとする徳は、偽物だ。数々の武勇、並外れた武勲を見ては、そなたの真価を見損なう王はいない。そなたを滅ぼそうなどと思う王はいない。王の怒りをかたり、わしの憎しみを受けるような真似は慎んだ方がよい。そなたの同輩には、そなたを滅ぼしかねない愛ではなく、服従の見本を示すのだ。大胆剛勇たること、まじめな徳よりも自尊心を貴しとすることは、英雄にふさわしい。だが、英雄たちも、必要なときには愛を抑えることが出来るものの、恋の語らいに巧みなのもよくあることだ。忠実な友の意見として聞いて貰いたい。今晚、王妃がマンガヌと共に到着する。わしは、そなたの恋の秘密を打ち明けてほしいとは思わない。よく、考えてみられよ。王がひとたび、「朕ハ、欲ス、」と言え。さらば、これだけ言えば十分だ。わしの言ったことはよく理解したはず。

シュレナ

それ以上のことをしてみせる。来るべきものが何か予見できる。何の恐れなく待つだけだ。

事態がどう進もうと、わが栄光だけが大切なのだ。わが命についてはどのようにでもするがよい。

第四幕終わり

第五幕

第一場

オロド、ユリディス

オロド

今となつては、告白など無用。確かな真実より、疑つての方が心地よい。疑惑の薄暗さがよいのだ。あれこれと詮索を重ねていたいのではな。ところで、門に警護を置くようにわしは命じた、そして誰か知れぬ愛人の護衛を散らした遠ざけた。無謀にもとち狂い、姫を拐かさないよう用心して。どれほど高い勇気も、力には屈する。結ばれた心に愛は何よりも大切なもの、続く怒り狂う大騒ぎも、仲直りの楽しさを増すだけと言うもの。逃避行の眩きが、わしにどんな処置を取らせねばならぬか、思い見るのも易きに過ぎるといふものではないか。そんなはめにならぬように、そなたが愛してるにせよ、ないにせよ、わしは予め安全な策を取った。

ユリディス

そのような数々のご配慮を頂き、とても有り難いことです。並み大抵の計らいではありません。陛下、陛下のお疑いの心にあつては、私が

かの勇士にかりそめにもいささかの関心を抱いておりましたなら、陛下の疑いの念よりはるかに、彼の運命はおぼつかないものです。また、私にしましても、陛下より一層不安に苛まれるのです。恋の道行については、陛下に請け合うわけには参りません。私の義務、私の身分、すべてがそれを拒むのです。最高の勇気も、力に屈するかも知れません。存じております。また、愛の魅力のなんたるかも知っております。でも、誇りがそれらを許しません。死ぬ覚悟があれば、何も怖いものはないのです。私は、王子だけの者です。

オロド

その通り、しかし、いつ、姫宮、いつにその幸福な日が、、、王子が心の限りを尽くして、、、

ユリディス

殿、王子は今夜にもわが夫となつたはずです。王子が陛下ほど私の胸中をのぞき込もうとなさらなかったならば。自分の恋情を控えるべき所にまで、好奇心のあまり厚かましくも入り込みました。私が他の人を愛してることを知っております。無体にも知ろうとなさつたのです。罰として、私が義務に戻るのを待つがよいのです。

オロド

どれほど長く延ばすとしても、姫宮、終わりというものがあるものです。

ユリディス

どんなに固い愛にも、義務は打ち勝つ時が来る。偉大な人は、栄える道を通して義務に赴く。そして、自らを征服しようとするとき、時間はいらない。一日あればたいしたことが出来る。一時間でも十分。かの幸いな一瞬間でさえ、心情が言を翻したりはしない。その一瞬は思いも寄らないときにやって来ることがよくあるものです。但し、私がやすやすと降るとお約束は致せません。陛下、私の心が乱れ、心痛に悩まされ、切迫した事態に置かれている限りは。

オロド

シュレナの運命が、それほどあなたの気遣いになるとは？

ユリディス

私は彼の数々の美点を知っており、怒りに駆られた主人や、嫉妬に駆られた恋敵を誰もが恐れるように、彼のために不安に駆られもするのです。しかし、私の気にかかるのは愛ではありません。こうした言い方は、陛下を傷つけはしないかと一層心配ですが、、あまり早く、真の理由を白日に出すよりも、愛にかかずってたほうがよいのかも知れません。

オロド

いいえ、姫宮、お話しください。あなたの心配ごとすべてを明かしてください。それを知らずして、その傷を癒すことが出来ましようか。あなたが籠もっている深い夜の闇の中で、あなたが隠してる病への正しい治療が選べましようか？

ユリディス

いつの日か王妃として登る王位のために私は憚りながら心痛めているのだと、シュレナを失えば、彼の武勲が取り戻した王笏をローマ人に渡すことになる、ミトラダトの謀反心を刺激して、陛下とパコリウス、フラダトを危険に曝すことになる。また、シュレナの死は陛下の支柱をもぎ取り、陛下は再び逃亡へ追いやられることを案じているなどとかかりそめにも申し上げられましようか？陛下、それはいささか不屈きというものでしょう。これは王子に申し上げるべきことでした。陛下には言ってはなりません。まことに正当な、解けぬ怒りを私は買いました。愛情のことでしたら、たやすく陛下の許しを得られたでしょうに。

オロド

いや、姫宮、そなたがこれほど政治に明るいとは？こんな風に黙ることの出来る方、ではなんと説明なさるかな、見たいものだ。そなたのシュレナが、わしに国々を取り戻させてくれたにしても、それは、わしに服従しない為であるのか。そのことに依って、彼の剛勇は歴然たるものとなったので、それがしを見せかけだけの主人でしかないと、今度はわしが彼の言いつけに従がわせようと、そなたはするの。この論議をすれば果てしない。愛に戻ろう、姫宮、もし本当に、、

ユリディス

私にお任せのほどを、殿、私は自分に勝ちま

しょう、そう努めます。それを願っています。
さらに加えれば、それを自らの掟とします。た
だ、時だけは私に決めさせてほしいのです。

オロド

王妃としての堂々たる言い方だ。姫宮、その
偉大なる魂の猛々しさは、気に入った。何も飼
いならせぬ高貴な矜持は、そなたが登る王位に
ふさわしいものだ。では、王妃としてそれがし
に命令を賜れ。フラダトは到着した。今夜は、
マンダヌが来る。ローマ帝国を震撼させた男が、
求婚にどんな礼譲をもって応じたか、二人とも
知ることになる。マンダヌは、シュレナを傍
ら見て恥いるだろう。フラダトは粗暴な奴だ、
喧嘩になろう。熱しやすく、激しやすい者を側
にして、シュレナは安全でいられようか？ 宮廷
から退去しない限り、彼の安全を請け合ことが
できようか？

ユリディス

帝国の誉れを、宮廷から追放なさる！ お出来
になれます、殿は王なのですから。私の故に、
彼が追放されるなど耐えられません。というの
は、理由など問題ではありません。どんな口実
を作ろうと、私が原因であることに変わりはない
のですから。マンダヌには、わずかの恥も心配
するお方が、シュレナには、私の心の奥底し
か問題ではないのです。彼を追放なさい。陛下
の機嫌を損じたのです。成敗なさい。罰し、
遠くへ流しなさい。彼は服従するだけです。私
は、自分の義務を果たすために彼の帰りを待ち
ましょう。陛下、それまでは、結婚も、愛もあ

りません。

オロド

シュレナの前で王子と結婚することがお出
来になるのか？

ユリディス

分かりません。でも、暴力は嫌いです。

オロド

それを防いで下さい、姫宮、御身を我が一族
とするか、あるいは、シュレナがマンダヌの夫
となるようにして下さい。このことが実現すれ
ば、私も満足して、あの大切な勇士に退去を求
めたりはしない。（シュレナを呼べ）そなたの
気位を鎮め下さい。高慢は、常に偉大な魂の徴
ではない。わしには婚姻が必要だ。どちらかを
選びなさい。でなければ、彼に別れの挨拶を言
いなさい、少なくとも、あなたとの別れを。

ユリディス

私は、陛下、約束したことを守れます。でも、
彼に会わないとは、約束しても無駄でございま
しょう。すぐに戦争が再開して、軍が彼を呼び
戻すことを知っているのですから。

オロド

その場合は、姫宮、やむを得ません。そなた
をシュレナと残しましょう。

第二場

ユリディス、シュレナ

ユリディス

殿、王は、私がパコリユスと結婚するか、殿がマンダヌと結婚するかいずれかを求めておいでです。拒んでは罰せられずにすみますまい。王にはどちらかが必要なのです。それとも、殿が追放されるか。

シュレナ

姫宮、拒否したのが、私の王に犯した罪ではないのです。姫宮は私を愛してる。それもまた、王を立腹させてるのではない。私の本当の罪は、今、王よりも高い名声と、大きな勇気を持つてることです。そこから密かな憎しみが生まれ、時が経てばますます強く増すのです。恩知らずに仕えれば仕えるほど、益々憎悪をかうことなる。彼らのためになすことすべてが、我々に徒としかならない。私の顔が癩でならず、私の榮譽が傷つける。わが心の奥底まで、卑屈となることを求め、時に懐柔、時に脅しを以て、私が立てた王のくせに、わが心を蹂躪しようとする。贈り物で私の気が惹けるかのように、或は、私を倒しても、自らは安泰であるかのように。私は、家来として王にわが命、わが全財産を負っている。王にすべてを負っているにしても、わが胸中は何も負ってはいない。胸中まで指図されるのは侮辱を受けるのと同様だ。最も深い恭敬に浴びせた暴行のごときものだ。ともかく、永久に別れねばなりません。姫宮。

ユリディス

いつまでもこの追放は続くのですの？

シュレナ

我らのために、彼らに徳を求めても無駄なこと。妬むものは、決して美点を許しはしない。とは言え、この別れは長い不幸ではない。私は遠くも行かないうちに、苦悩のあまり死ぬでしょうから。

ユリディス

別れるという思いだけで、あなたより先に死んでしまおうと思ひこんでいる私をご覧になって怖れて下さい。私を愛しているなら、死なないで下さい。

シュレナ

あなたが義務をまとうするのを、パコリユスが私のものであるお心を、あなたの御身を我が物とするのを、もしくは彼が王冠を手にするのを知って、生きられるでしょうか？こう思うだけで、切ないつらさだ。私がこの足で赴こうとしている先は、辺鄙の地ではなく、姫宮、死なのです。

ユリディス

天よ、何故私たちが誰のものにもならないか、或は、お互いのものになることを我らの手に委ねなかったのか？

シュレナ

身分の相違があなたを厳格な協定に縛りつけるのを、愛はむざむざと見過ごさなければな

らないのか？

ユリディス

身分の相違については、楽観してました。あなたの名声、武勲は、私の生まれに匹敵します。クラススが、国王を復権させた勇士を、さらに私にふさわしいものとししました。アルメニアが苦難に曝されてるのを眼にして、荒廃した祖国だけが私を虐げました。国家の為に身を投げ出し、和平協定の犠牲に甘んじ、私たちのように激しい恋が、愛する相手の眼に否応なく降伏するものと思ひもせず、私は自分の気持ちに打ち勝つと誓ったのです。公共の福利のために私は、約束をした。でも、なんということ！。約束したとき、殿、あなたにお会いしておりませんでした。ここでお会いして、私の過失が明白となり、あなたから取り上げた宝を与えるのを延ばしてるのです。私に望めるただ一つの幸いといえば、いつも約束しては延ばすことなのです。

シュレナ

なんと幸福なことであろうか、でも、大胆にも何を申し上げましょうか？わが恋のあくがれた身に余る実のない幸福よ！私に降りかかる苦難に眼をお閉じ下さい。幸福な生活に思いを向けて、そして、私を死ぬが儘にするのです。地上で第一の王位が、あなたの眼の前にあります。雷鳴以外恐れるものはなく、人類の運命を握り、ローマ人を壁の中でも震わす王位。

ユリディス

その王位と、王位の持つすべての利益を思いますと、殿、全ては殿のなされたことしか目に映りません。その栄光も、私には捕らわれの栄光でしかありません。私を待ちもうけるものに、私が失うものを見るのです、嗚呼、殿！

シュレナ

私をひしく苦しみにご容赦のほどを。涙するほど、品下つてはならない。多くの人が羨み、私には余りにも高くついた、この強い堅固を持って、行かせて下さい。

ユリディス

行きなさい、そうせねばならないのですから、私の心にふさわしく、たくさんの不安を与えた雄々しい心をもって。私は、あなたの例に従いましょう。あなたは、、、いや、パルミスが別れを告げにやってきます。おかげで、死ぬような思いに関わらず、お会いする楽しみを得られそうです。

第三場

ユリディス、パルミス、シュレナ

パルミス

殿、王が提案された結婚をしなければ、追放されると噂されてますが。

シュレナ

そうではない、パコリュスが願う結婚まで、何日間か領地に引き籠もるよう命令された

のだ。

パルミス

出発するんですの？

シュレナ

出発する。

パルミス

王が怒ってるのに、領地まで安全に行けましょうか。こうした失寵につきものの危険から護られているのですか？ありていに言えば、長い道のりの間、毒も刺客も現われないとでも？

シュレナ

王は、そんな不正を私から始めるほど、私のした忠義を忘れてはいない。王の血筋を引いた者が、自らの支えを失うわけがない。

パルミス

王はそうでも、兄上を嫉んでる者すべてがそうでしょうか？殿、王の罪を免除し、王の弁護をする追従の輩がいないんでしょうか？王に取り入ろうとして、恥もなくしばしの怒りに身を曝すものがあるのでは。とってつけた怒り、卑劣な政治行為と否認しながら、心中では讃えている怒り。偽りの憤激が消え行く儘に放っておけば、表沙汰にならないことが免れさせる怒り。

シュレナ

卑劣な繕った怒りでも、しばしばあまりの評

判となり、人々を欺き通せないもの。私の死が王の気に入るのなら、王が遅かれ早かれそれを望なら、私の死が偶然であるより罪である方がよい。誰もが、私の死を、自然が課し、運命が司る尋常な法に帰さないでもらいたい。その邪な張本人は、いくら罪を隠そうとも、全人類の嫌悪となってほしい。そして、消えることのない憎しみが生まれ出て、彼のすべての家来が反逆してもらいたい。

パルミス

復讐が徹底して為されるのは望むところですが、この上ない復讐が加えられても、死んだ者は生き返りはしない。たとえ宇宙全体が怒りに沸き上がったとしても、死者や妹や愛人を慰めはしない。

シュレナ

どうしようとするのだ。妹よ。

パルミス

安全な場所があります。

シュレナ

どんな場所が？

パルミス

兄上に提案された結婚です。、マングヌの腕の中で、何も恐れずに平穏な日々を、、、

シュレナ

わが妹君がそう命じるのか。我が王女の面前

で裏切りを平然と命じるのが、妹の君なのか！

パルミス

我らの情熱に何の望みも消え果てたとき、命と引き換えに貞節を守る義務がありましようか？ところで、姫宮は私の味方をして、兄上を説得してくだらないのですね。目配せ一つで何もかも決定できるはずのお方が。姫宮！兄上の危険がお気に入るようなことなのですか？

ユリディス

姫、黙ってるだけでもおおできだと思のですよ。あなたが私の宝を私の目にお与え下さるとき、私が出来ることといったら、何も言わないこと。出来るなら、私の嫌う縁組を彼に無理矢理させなさい。あなたにはお話すのままにしておきます。これ以上のことはご免除下さい。私は反対は申しません。気持ちが動揺して、、、いささか言い過ぎました。これ以上追求なさないで下さい。

シュレナ

何と言うことだ、私の破滅は必然と言うのに、媚という幸運な名があれば私を護ってくれるとでもお思いなのですか？自然に逆らい、その情を無視して、国王の半分は肉親殺しから生まれている時に。支配権のために、兄弟は兄弟の血で手を染めているときに？息子は父の死を今かと待ち望んでいるときに？オロドは、もし私がいなかったら今どうしていただろう？ミトラダトは、オロドにこれほどの忠義を誓っただろうか？パコリユスは、フラダトにこれほど

まで安心していられたとそなたはお思いか？フラダトの心はよく知らない。彼がまもなく蜂起するかどうかも。パコリユスを眩ます高位を、彼の父と兄が長く保てるかどうかも分からない。その時は、彼らを守るためにもう私はいないだろう。つまりは、拒絶したことが、私の咎ではないのだ。私の本当の罪は、わが栄光であって、わが愛ではない。前にも言った通り、わが罪は栄光とともに毎日増していく。彼らに仕えれば仕えるほど、罪は増す。彼らが私の死を欲する限り、それは避けられない。結婚によって死を先に延ばせば延ばすほど、彼らに表を繕わせるだけ。より奥に隠れた、より暗い、より容易な暗殺を、不動の友情という結構なみでくれの陰に隠すに過ぎない。晴の縁組に安全を求めるのは、無益な卑怯事をなし、いたずらにわが名を汚し、わが没落の下にわが栄光を埋めたという非難をかうことになる。しかし、神々よ、これほどに奉仕しながらも、王命に依ってわが命が奪われるなどということがあり得ようか？いや、いや、オロドは私をよい目で見てる。ご覧の通り、妹の君よ、私には一人の番兵もついてない。私は自由だ。

パルミス

それだけ一層、王の怒りを恐れているのです。もし王が警護をつければ、兄上について責任を持つことになりましょう。でも、殿、おつきの者を呼ぶことが出来ますか？自由に逃げられますか？ゆるがせならない企みがなければ、一切の門を固めたりするのでしょうか？その企みを破るには、武力しかありません。血のつなが

る者の愛に依って、愛の持つ優しい力に依って、...

シュレナ

優しさは、英雄の愛ではない。落涙に耳傾けるのは、英雄の恥だ。しるべき情熱の優しさの最中でも、いくらかの頑なさは偉大な心にふさわしい。

パルミス

では！もしや、...

シュレナ

さらば、そなたの取り乱す様を見ては、王よりもそなたを恐れねばならない。

第四場

ユリディス、パルミス

パルミス

兄上は死に赴いた。あなたのせいですよ。あなたの愛が止めなかったのですから。涙を流して言っても無駄でした。様々動き回っても無駄でしょう。でも、あなたの言うことなら聞きます。その労を惜しまないで下さい。彼を留める一言をおっしゃって下さい。姫宮。

ユリディス

彼が死ねば、私も後を追います。

パルミス

私も同じことが言えます。でも、それでは足りません。あなたはあんなにも愛していらっしゃる、姫宮、決心を揺るがすのです！

ユリディス

後を追うことが、愛し足りないことでしょうか。

パルミス

そのようにどんなに愛しても、生きかえらせはできません。私たちが死ぬように苦しんだとて、何の役に立つでしょう？彼を追って死ぬことが、何になるのでしょうか？

ユリディス

あなたは余りにもあわてふためき過ぎですね。王は憤りの最中にも、言っではおりません、...

パルミス

王がなさろうとすることをすべてあなたに言うでしょうか？かの勇士が擁立した王位にあって、たとえ彼の命を奪おうとしても、処刑するなど敢えて宣告しましょうか？恥も知らずに出来ることでしょうか。そして、あなたは、遅きに失するというのに、彼の配慮をするのにぐずついていらっしゃるんですの？もう時間はありません。お行きなさい。何故、ぐずぐずなさるんです。たぶん、今や、剣で突き殺されてる、おそらく、...

ユリディス

なんという戦慄を私の心に投げ入れるのか！

パルミス

嗚呼、どういう訳？姫宮は駆けつこうとはなさらない！

ユリディス

そのようなことが出来ましょうか、姫？好きな人を嫌いな人にあげるなんて。どのような愛ならば、そこまで裏切られるのでしょうか？愛する人をマンガヌに与えるのは、私自身の手で我が身を殺すことだにご存じですか？

パルミス

そうなさるか、あなたが彼を滅ぼすかのいずれしかないことを知ってのことですか？

第五場

ユリディス、パルミス、オルメーヌ、

ユリディス

もう抵抗はいたしません。あなたがそうさせないのですから。オルメーヌがやって来る。彼女に言いに行きましょう、シュレナは結婚してよい、、、後はお任せします。私は悲しむにくだるばかり。

パルミス

泣きじゃくってやってきます。

オルメーヌ

姫宮にとって何という辛い仕打ちになるでしょう！シュレナのために、、、

パルミス

逮捕されたの？

オルメーヌ

宮殿から通りへ出たとたん、どこからともなく矢が放たれました。ただちに2本の矢が続き、そして、3本の矢がすべて心臓に命中したように、かの征服者は血塗れになりながら広場に倒れ、死にました。

ユリディス

あまりにもむごい！

オルメーヌ

ご自分のことをお考え下さい。側近の者が姫君を威圧してます。私達に王を軽んじていると叫んでる声を耳にしました。

パルミス

恩知らずの王子、卑劣な王！天よ、もし地上でなされたことを見そなわれているならば、雷鳴を何に使うのか。かような暴君が破滅しないならば、燃え盛る矢を誰のためにとっているのか。そして、あなた、姫宮、あなた、役たたずの愛、無敵の傲慢さは、いささかも動じるところがないようね、彼に情熱を燃やしながらか、決断することなく、あまりに兄を愛しすぎたがために、彼を殺すことになったあなた様。そのよ

うな愛をもって行って、行ってその愛の結末を
 ご覧なさい、その実を摘み、その美味を賞味な
 さい。おや！彼を滅ぼしながら、涙も流さない
 とは？

ユリディス

その通り、泣きません。姫君、死にます。オ
 ルメーヌ、私を抱えておくれ。

オルメーヌ

なんとおっしゃいます、お姫様。

ユリディス

気高いシュレナ、わが魂を受け入れ給え。

オルメーヌ

ここから、もっとよく手当できるところへお
 連れしましょう。

パルミス

死を予感させる苦痛に猶予を、大いなる神々
 よ、汝らが私を投げ入れた苦しみの最中にあっ
 て、我が仇を打たぬ限り、我が死を受け入れ給
 うなかれ。

第五幕終わり

注

(1) カスピ海の南にある、パルティア王国の繁

華で重要な都市。

(2) ローマの著名な将軍、富裕で聞こえた。

(3) アルメニアの国王

(4) プルタルコス、クラッスス伝、二五章に
 父クラッススの死が、三一章に息子の死が語ら
 れている。

(5) 登場人物の表に載っておらず、舞台にも登
 場しないが、パルティアの王女であることは明
 白である。

(6) オロドの息子、パコリュスの兄弟。

(7) 実際はミトリダト、オロドの兄弟。コルネ
 イユがミトラダトと改名したのは、前年167
 3年、ラシーヌが『ミトリダト』を上演してい
 たので、それとの混同を避けようとしたのだら
 う。

底本、Pierre Corneille, **Suréna général des Parthes**
 Tragédie, édition, introduction, et notes par José
 SANCHEZ, Nizet, 1974

作品梗概集 7

*初演年代は、原則としてダイエルコウフ＝オルスボエルに拠ったが、他の研究者の推定に基づく場合はその名前を年代の後に記した。

*梗概集の後に索引を付した。

Rotrou:Les Ménechmes

ジャンル 五幕韻文喜劇

初演 1630年頃 オテル・ド・ブルゴーニュ座

出版 1636年

主な出典 プラウトゥス『メナエクス』

プラウトゥスに取材した最初の作品で、三作中、原作に最も忠実であるとされる。ヴィオレル・デュックはスペイン劇の好評に飽き足らず、古代劇導入に努めたのは評価できるが、人物像、習俗が描かれず、モリエール程の成功はなかったと言う。しかし勿論、完全な翻訳というわけではない。鈴木康司は登場人物が当時のフランスの習俗に抵触しないよう適度に矯正されたこと、加えて原作を凌いだ大団円の独創性を指摘している。1642年頃の『クラリス』序文でロトルー自らプラウトゥスを「喜劇の父」とまで呼んで、傾倒ぶりが推測できるが、アダンは後のイタリア喜劇(具体的には1642-47年の『妹』)導入の口火としてもこれらを評価する。モレルは狂気の怒りの絶頂、古代劇では純粹にゲームであったものがここでは相互の自己同一性の移動になっている、美しい恋愛感情、取り違えと狂気の混合、外見の相似性による皮肉などにこの喜劇の特徴を見る。

〔第一幕〕

浮気なメネクム・ラヴィ Ménechme ravi は、食客エルガスト Ergaste に唆され、かねてより片思い中の美しい未亡人エロシー Erotie に言い寄り、ダイヤモンドの髪飾りを贈って機嫌を取ろうとする。エロシーの頑なな態度は相変わらずだが、高価な贈り物が効を奏して、食事に招待して貰えることになる。エルガストもしてやったりとよろこぶ。エロシーは奴隷に食事の支度を命じて退場する。

〔第二幕〕

幼いころにさらわれて行方不明の兄弟を探すメネクム・ソジクル Ménechme Sosicle は、奴隷のメセニー Messenie を伴い、ラヴィのいる港町に流れ着く。六年に及ぶ旅に疲れたメセニーは主人があまりに朴念仁なのに呆れ返っている。エロシーの奴隷がそのソジクルを見て、ラヴィと取り違える。二人こそまさしく生き別れの兄弟、性格は正反対だが、顔がそっくりなのだ。しかし、そのことに誰も気付かない。そこへエロシーが登場し、ソジクルは彼女に一目惚れする。エロシーはソジクルをラヴィだと思っているから、彼の言動は悪質な冗談、もしくは狂気だと思う。話はどこまでも平行線なのだが、ソジクルはエロシーの言うとおりにラヴィになりすまし、ラヴィから贈られた髪飾りを預かって、細工を直すことを請け負う。

〔第三幕〕

エルガストは食客の境遇を嘆き、さっきとは打って変わった主人の態度に腹を立てる。だが、エルガストが主人と取り違えているのは、実はそっくりのソジクルである。ソジクルは勿論、エルガストのことなど知るわけもなく、彼の怒りが理解できない。また、ラヴィの妻が恐ろしい形相で迫ってくるのに驚いて逃げ出す。入れ代わりにラヴィが現れ、妻とエルガストに吊しあげられる。ラヴィの味方のはずのエルガストはソジクルにされた仕打ちの仇をここで返そうと、主人に従わない。妻は自分のダイヤモンドがないのはエロシーにやったからだろうと問い詰める。ラヴィは咄嗟の言い逃れに、彼女が同じような細工のを欲しがったから見本に貸したのだ、として、堂々とエロシーの家のドアに消える。エルガストは奥方に報酬を約束される。ソジクルに髪飾りを渡したエロシーはラヴィにそれを返してくれと言われて怒りだす。ラヴィは皆から狂人扱いを受けて困惑する。

〔第四幕〕

ソジクルはラヴィの妻に責められ、訳がわからない。しかし彼は証拠の髪飾りをもっているので、逃げられない。妻の父で、ラヴィの舅にあたる老人が夫婦の仲裁をしようと現れるが、相互に言動が奇異だと思い、狂人扱いし合う。妻は助けを、老人は医者を求め、ソジクルは災難を避けるべく、退場する。医者を呼んで来た老人、妻はラヴィを拘束する。ラヴィは皆を狂気と思う。メセニーが抵抗するラヴィを助けるが、彼も主人がおかしいと思う。この機に乗じて、メセニーは解放を願うが、もともと自分の奴隷でないラヴィはあっさり許す。メセニーが宿屋に鍵を取りに戻る間、ラヴィは平静にしてくれる人物を求めて退場する。

〔第五幕〕

恋に取りつかれたソジクルにメセニーは鍵を返そうとするが、主人は奴隷を狂気だと思う。解放した覚えなどない。二人の前にエロシーがやってきて、髪飾りのことを問いただす。ソジクルは髪飾りは細工師のところにあると言ってエロシーの家に入り、残った奴隷は運命を嘆く。ラ

ヴィの妻とエルガストはメセニーを見付け、詰め寄る。互いに主人を取り違えている同士の間、混乱した会話の連続のうちに、何も知らないソジクルが出て来て、妻たちに責められる。いささか冷静になったラヴィは医者連れて戻り、メセニーに礼を述べる。二人の主人に驚くメセニー。ついに兄弟は再会し、今朝からの奇妙な事態のすべてに合点がいく。皆、互いを許し合い、奴隷は解放され、食客は晩餐にありつくのだった。

時間はある日の朝から夕方まで、場所はエピダムニーの港町の辻(及び医者家の前)、物語の主な筋は兄弟探し、浮気の発覚、恋愛成就の同時進行。

作品梗概集

(ローマ数字は掲載号、アラビア数字はページを示す)

Bidar: <i>Hippolyte</i>	III 79	: <i>Astrate, roi de Tyr</i>	X 96
Boyer: <i>Ulysse dans l'île de Circe</i>	III 95	: <i>Atys</i>	VI 91
Corneille, Thomas		: <i>Cadmus et Hermione</i>	VI 86
: <i>Ariane</i>	III 89	: <i>Thésée</i>	VI 89
: <i>Bérénice</i>	IV 83	Mairet	
: <i>Camma</i>	III 88	: <i>Chryseïde et Arimand</i>	IV 63
: <i>Circé</i>	III 98	: <i>Les Galanterie du duc d'Ossonne</i>	IV 68
: <i>Le Comte d'Essex</i>	VI 92	: <i>La Silvanire</i>	IV 66
: <i>Darius</i>	IV 85	: <i>La Sylvie</i>	IV 65
: <i>La Mort d'Achille</i>	III 9	Pradon: <i>Phèdre et Hippolyte</i>	III 81
: <i>La Mort de l'empereur Commode</i>	VI 83	Du Ryer: : <i>Alcionée</i>	X 92
: <i>Persée et Démetrius</i>	VI 85	Rotrou	
: <i>Timocrate</i>	IV 81	: <i>Agésilan de Colchos</i>	VII 94
Corneille, Pierre: <i>Andromède</i>	III 96	: <i>Amélie</i>	IX 79
Desfontaines: <i>Bélisaire</i>	VII 100	: <i>Antigone</i>	VI 80
Desmaretz de Saint-Sorlin: <i>Mirame</i>	VII 103	: <i>La Bague de l'Oubli</i>	III 83
de Visé, Donneau		: <i>La Belle Allphrède</i>	III 85
: <i>Les Amours de Bachus et d'Ariane</i>	VII 107	: <i>Belisaire</i>	VIII 98
: <i>Les Amours de Venus et d'Adonis</i>	VII 106	: <i>Captifs ou les Esclaves</i>	IX 78
Garnier: <i>Hippolyte</i>	III 74	: <i>Célimène</i>	VIII 84
Gilbert		: <i>Cleagénor et Doristée</i>	IV 72
: <i>Les Amours de Diane et d'Endimion</i>	VII 105	: <i>Clorinde</i>	IX 81
: <i>Hypolite</i>	III 78	: <i>Cosroès</i>	IX 76
Gougenot: <i>La Fidelle Tromperie</i>	VII 96	: <i>Crisante</i>	VI 78
La Pineliere: <i>Hippolyte</i>	III 76	: <i>Diane</i>	VIII 82
L'Hermite de Vauzelle: <i>La chute de Phaéton</i>	III 94	: <i>Don Bernard de Cabrère</i>	VIII 80
Lully et Quinault		: <i>Filandre</i>	VIII 85
: <i>Alceste</i>	VI 88	: <i>Florimonde</i>	IX 82
: <i>Amalasonte</i>	X 94	: <i>L'Heureux Naufrage</i>	VIII 93

: <i>L'Hypocondriaque ou le Mort amoureux</i>	X90	: <i>La Folie du sage</i>	IX 84
: <i>Iphigénie</i>	VI 81	: <i>La Marianne</i>	III 74
<i>Les Ménechmes</i>	XI 77	: <i>La Mort de Chrispe</i>	IV 78
: <i>La Sœur</i>	VII 102	: <i>La Mort de Sénèque</i>	IV 77
: <i>Laure Persecutée</i>	III 86	: <i>Osman</i>	IV 80
: <i>Les Occasions perdues</i>	IV 70	: <i>Panthée</i>	IV 75
Tristan l'Herrnite		: <i>Le Parasite</i>	X 99

会員名簿（アイウエオ順）

浅谷真弓	伊藤洋	岩瀬孝	大越敏男	片木智年
小林卓	自石嘉治	神保剛	鈴木美穂	関根敏了
関谷苑子	千石玲子	竹田宏	戸口民也	富田高嗣
野池恵子	萩原芳子	橋本能	浜野トキ	真下弘子
丸山弓子	皆吉郷平			

エイコス XI

発行日 1997年4月15日
発行者 〒162 東京都新宿区西早稲田早稲田大学教育学部
伊藤洋C/O
17世紀仏演劇研究会 TEL 03-3203-4141
印刷 (有)七月堂
〒156 東京都世田谷区松原 1-38-5 田坂ビル3F
TEL 03-3325-5717

頒価500円